ISSN 1340－5985

広島県立美術館

研究紀要

第11号

児玉希望と写生帖 …… 永井　明生　*1*

南薫造「美校・航海日記」
－東京美術学校時代（後期）～イギリス到着まで …… 藤崎　綾　*47*（8）

圓鍔勝三の初期作品をめぐって－《星羅》にいたるまで …… 石川　哲子　*54*（1）

2008

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.11

2008

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

南薫造「美校・航海日記」
ー東京美術学校時代（後期）～イギリス到着まで

藤　崎　　綾

広島県出身で「日本の印象派」といわれる油彩画家・南薫造（1883・明治16～1950・昭和25）は、多くの日記を残しており、広島県立美術館では御遺族の御協力の下、資料の公開・整理を行ってきた。筆者は、なかでも画業の形成や発展に重要な影響を与えたと考えられる長期の国外滞在に焦点を当て、『インド日記』（広島県立美術館研究紀要第７号・2004年）、『従軍日記』（同８号・2005年）を紹介。岡本隆寛・高木茂登の両氏により、「倫敦日記抄」（『南薫造日記・関連書簡の研究』1988年）としてすでに紹介されている滞欧日記（1907年９月～1910年４月）とあわせると、主要な海外日記は公開されたといってよいと思われる。

これら三度の海外体験のなかで、画業の形成にもっとも影響を与えたのは、いうまでもなく明治末のヨーロッパ留学である。本稿では、「倫敦日記抄」に先行する、美校時代の後半・1904（明治37）年６月の夏休暇から、イギリス上陸前日の航海までを記した一冊の日記を抜粋して紹介する。ちなみに現在、美校時代の日記は二冊確認されており、残る一冊は1903（明治36）年１月から翌年４月までの約15か月を記す。本稿で紹介する日記は、便宜上「美校・航海日記」（以下、日記と記述）と題した。縦21cm×横17cm、紙数164ページのノートに横書き、日記的内容が120ページ、末尾に住所録や、自作の題名・所在等のメモが12ページ続く。

この時代の南は、首席、二席など美校で優秀な成績を修めつつ、卒業後の進路として留学を検討しはじめている。休暇で帰省した1904（明治37）年８月末頃には、岡田三郎助の紹介で小林千古[1]を訪問。千古は、同郷の美術家のなかでは最初期に留学した画家の一人で、アメリカ、フランスに学んでいる。またほぼ同時期に、アメリカから帰国間もない従兄・南廉平[2]を訪ねているほか、翌年３月11日にはセントルイス博覧会のため渡米した大村西崖の帰朝講演を聴講。留学を志した当初、南はアメリカで就労しつつ学ぶつもりであったが[3]、その背景には、苦学しつつもアメリカの美術学校を卒業し、ついにはヨーロッパ留学も果たした千古の実体験や、大村の語った資金調達法などもあったと考えられる。いつ頃からヨーロッパを志したかは不明だが、1906（明治39）年末頃には正木校長や黒田清輝、岩村透らを訪ね留学につき相談、フランスやベルギーを勧められている。この時点で「ベルジュームへ一度行かう」と記しているのは、岩村の薦めがあったとともに、南が当時のフランスの作家をあまり高く評価していなかった[4]ためでもあろうか。

結果的には渡英するわけだが、渡航一月半前の日記に「愈々英国へ行く事に決定」とあるのみで、イギリスに決定した理由は記されていない。家族には、フランスに行くつもりが、居心地が良かったのでイギリスにとどまったと語り、帰国後の雑誌[5]でも同様の趣旨を述べている。「私は初め水彩画が見度かったので、先ず英国に行った」[6]という発言もあるが、ベルギー留学への言及は確認できない。

しかし、当時の経済事情では何度も渡欧することは困難で、留学の出発点をイギリスに置いたのは、

熟慮の結果と見るのが自然だろう。着英が近づいたマルセーユ上陸時の日記には、フランス語がよく理解できない旨の記述があるが、フランスやベルギー留学を主眼としながら、勤勉な南が会話の習熟をはからなかったとは考えにくい[7]。両国訪問を予定しつつ、長期滞在の拠点としてはイギリスを想定していたと考えるべきではないだろうか。黒田訪問に同行した寺崎武男[8]や平井武雄[9]がそれぞれイタリア、アメリカに渡ったことから考えても、渡航先についての黒田等の意見はあくまで参考としたに過ぎず、海外体験を聞くことが主目的だったのではないだろうか。南の場合は、（渡米が念頭にあったためか）中学時代から英会話を学んでいたことや、英語文化圏への渡航経験者である廉平が身近にいたことなどから、滞欧生活の出発点としては、イギリスは好適だったといえるだろう。廉平には早くから留学について相談しており、渡欧半年程前に、南が通う富士見町教会の関係者から持ち上がった費用援助の話にも廉平が関与している。結果的に受けることはなかったが、日記からは廉平が何らかの支援を依頼していたと読める。富士見町教会は植村正久[10]の創設によるが、下谷一致教会の牧師だった植村が麹町まで出張し伝道を始めたことに端を発する[11]。求心力のあった植村の死後、富士見町教会では信者の移動があったといい、留学支援を申し出たと見られる人物も他の教会に転出、南との関係について現時点では確認できない。しかし、渡英経験のある植村の存在など、キリスト教（教会）と南の留学との影響関係には今なお検討すべき点があり、今後の研究課題としたい。

留学に関わる記述の他にも、制作や交友、芸術観等、当時の南を知る多くの情報が日記により確認できる。富本憲吉とは1906（明治39）年10月から同宿となり、交友がいっそう深まるとともに、五島健三[12]、寺崎、平井ら、美校生の名前が多く登場する。富本との郊外写生や、画集が出版できるほど描きためた瀬戸内海風景への取り組み、休暇中に制作した作品を持参し岡田三郎助の批評を乞うなど、熱心に制作に打ち込む姿も見られる。帰省の途次には住友家のコレクションを見学、コランやモネ、ローランスなどフランス近代絵画を見る貴重な機会となった。他作家に対する批評のなかでは1904（明治37）年の白馬会展の内容がもっとも充実しているが、主題や構図、色彩などを丹念に観察し論評、なかでも青木繁の《海の幸》に対する激賞が注目される。「決シテ寫実的デ無イ所ニ大ヒナル神秘ガコモッテ居ル。（中略）compositionト絵ノ気持、意味ハ実ニ立派ナモノデアル」「Compositionトシテハ場中第一否ナ今迄ニ我国ニ無イ程ノヨイモノト思フ」という記述からは、鋭い批評眼がうかがわれるとともに、「本当ヲ眞ス」「寫生画」と、「自分ノ製作」である「絵」とは異なるものだとする黒田の考え方[13]を理解した発言といってよいだろう。大正時代初期には、《五境》など構想画的作品に取り組むこととなるが、現実を単に写すのではなく、「意味なるもの」のある絵を好むというこの時代の姿勢や志向が作品化したものと捉えることができるだろう。

美校生活の後半期には、研究や努力を重ねた作品や絵画持論の構築、豊かな交友など充分な成果があったが、同時に将来への大きな決断を下さなければならない時期でもあった。留学を間近に控え、医業を継ぐことを望んでいた父親の真情を思う記述は、美術家として邁進しようとする真摯な姿勢と家族への愛情との間で揺れ動く複雑な心境を赤裸々に伝える。３年の留学を終えて帰国後、滞欧作で一躍画壇の注目を集めた南の出発点は、相反する進路の可能性のなかで思い悩んだこの時期にあるのかも知れない。

1907(明治40) 7月24日、南は博多丸に乗船、いよいよ渡航が始まる。日記の末尾には「明治四十年八月十三日」の年記とともに、航海中の日記に登場する石坂、高橋、松波、松久、三潴に、伊丹繁[14]、中山茂樹[15]、西盛之進[16]、廣川和一[17]を加えた9名を「博多会会員」として記しており、同船したなかでもとくに懇意であったことがわかる。このほか、船員として登場する斉藤文也とは、滞欧中、また帰国後も交友が続き、書簡のやりとりなども行われた。斉藤はイギリスの美術家や在英の日本人作家らと懇意であったことが滞欧時代の日記や書簡から知れる。

以下、日記原文を紹介するが、紙数の関係から一部を割愛、制作や批評、その他美術関係の事象等、主要な部分の掲載とした。発表を意図していないため他者への否定的表現なども見られるが、資料性に鑑みそのまま掲載することとした。なお、日記内容の参考ともなるため、航海中に用いたスケッチブックの一部を口絵5及び末尾に紹介した。

【註】

1　小林千古(1870-1911)。広島出身の油彩画家。1888(明治21)年渡米。1900(明治33)年末から約1年間ヨーロッパに滞在、岡田三郎助等と親交。南の日記には最初の雅号である万古として登場する。

2　南廉平(1876-1926)。中学時代に広島で洗礼を受け、1895(明治28)年上京、植村正久に師事。1901(明治34)年6月頃よりアメリカに滞在し神学校で学ぶ。千駄ヶ谷教会等をへて1911(明治44)年より富士見町教会幅牧師、後に同教会の牧師となる。南は廉平を兄のように敬愛していたといい、美校時代の一時期は廉平のもとに下宿していた。なお、浄土真宗を信奉する家に育った南が、キリスト教を信仰し1897(明治30)年に洗礼を受けるにいたったのは、廉平など親戚のキリスト教信者から感化を受けたためと考えられている（以上は主に、南勇『南家の記録』1987年 pp. 1-4、15を参照した)。

3　1907年7月1日付日記

4　1905年4月1日付日記

5　『美術新報』第9巻11号 pp. 6-8

6　『美術新論』第2巻3号 pp. 121-123

7　フランス語は美校でも学んでいるが、留学を控え、正則中学校で英語を学んだという。ちなみに、すでに中学時代に、教会関係者の外国人のもとへ英会話を習いにいっていたことが日記からわかる。

8　寺崎武男(1883-1967)。イタリアに留学、エッチング等を学ぶ。

9　平井武雄(1882-1943)。アメリカに留学、アート・ステューデンツ・リーグ等で学ぶ。

10　植村正久(1858-1925)。明治・大正期のキリスト教思想家、牧師。番町一致（日本基督教団富士見町）教会を設立、終生の活動の拠点とした。

11　ちなみに、この伝道集会は当初イーストレーキ家で開かれたといい、美校の生徒で南とも親交のあったマリー・イーストレーキの自宅と考えられる。なお、富士見町教会や植村正久については、日本基督教団富士見町教会編『富士見町教会百年　文集・年表』p.39、p.63を参照した。

12　五島健三(1886-1946)。富山県南砺市出身。明治末から大正にかけて南宛に書き送った書簡が遺されている。

13　1905年3月22日付日記

14　伊丹繁(1880-1921)。東京帝国大学医科大学出身。ドイツで医学を学び、1909(明治42)年帰国。以下、註釈部分における海外渡航者の生没年、出身校、留学先、帰国年は、手塚晃・国立教育会編『幕末明治海外渡航者総覧』(柏書房 1992年）を参照した。

15　中山茂樹(？-？)。千葉医学専門学校出身。ミュンヘン大学等で医学を学び、1909(明治42)年帰国

16　西盛之進(1877-1936)。東京帝国大学医科大学出身。ウィーン大学等で医学を学び、1910(明治43)年帰国

17　廣川和一(1877-1945)。東京帝国大学医科大学出身。ウィーン大学等で医学を学び、1910(明治43)年帰国

「美校・航海日記」

本文中の□は判読不能の文字を、□内の文字は、判読の可能性のある文字を示す。「／」は原文の改行を表す。句読点は可能な限り原文に忠実に記したが、句点と読点の判断がつきにくい場合は文意より解釈した。また、内容の理解を助けるために、区切りを意図する空白を加えた箇所がある。一部に誤字・脱字も含まれるが、明らかな誤りを除き原則として原文のまま掲載した。筆者による日記内容の要約には、■を付して記した。

末尾に紹介したスケッチブックの図版のうち、到着日等の書き込みがある場合、図版の下段に記した。

『日日起タ事ヤ又タ己ガ心ニ浮ンダ／事ヲ記シテ置クノデアルカラ、單ニ書イ／タバカリデ無ク時々開イテ見ル可キ／モノデアル。後日絵等画ク時ニ大／ヒニ得ル所ガアルデアラウ。』

明治三十七年六月（1904）。夏休暇。／今年ノ夏休暇ハ昨年ヨリハ後レテ六月ノ末頃カラ始マッタ。／横濱カラ汽船シーク号デ四日市迄、ソレカラ関西鉄道ヘ／乗リ遇然ニモ奈良見物ヲシタ。ガ別二面白イ事モ無ク／只ダ「見物」ニ過ギナカッタデアッタ。尾道デ一泊シテ／朝内海丸ヘ乗ル。／「毎年夏休ミニ帰ル時ニハキット思フ事ダガドーモサウ／行カナイ。今年ハ出来ルダケ勉強シテ見タイト思フ。夏／休暇ノ様ナ機会ハ他ニハ無イノデアルカラ、人体、肖／像、風景＝大芝ノ方ノ朝ノ景色ハ必ズ良イト思フ。之レ／ガ為メ小舟ヲ一ツ借ル事。尾道ノ朝ハ実ニヨイ。燈／台守[1]ガ画イテ見タイ。牛ニ暑イ強イ日光ノ下デ小児／ガ乗テ居ル所。同ジク強イ光線デ小児ガ水遊ビスル／所。之レハ裸体ノcompositionノツモリデ。廣島ヘモ行ク／ガソシタラ太田川ノ上流ニ上ラフ。内海ノ奥ニ大キナ池ガ／アル。ヨクハ知ラナイガ慥カニヨイラシイ。彼ノ“Natural Mirror”／ト能ク似テ居ルト思フ。野路山ニモ登ラフ。一昨日汽／車ノ中カラ伊勢ノ山ヲ見タガ実ニヨカッタ。野路モ余程此／ノ趣キガアルラシイ。小サナスケッチハ別ニ之レト定メテモ居ナイガ／我家ニ二枚バカリハ費シタイ。海景ハ別ニ良イトモ思／ハナカッタガ今船ノ内カラ尾道ノアタリヲ見ルトボート／シタ霧ノ中ニ帆まへ船ガ碇泊シテ居タリ又タ日光ヲ／受ケテ突拍子ニ白ロク光テ居ル帆等実ニ良イ。殊ニ水／面ノ色ッタラ無イ実ニ小サナ所ニ非常ナル面白サガ有ル。／イヤ小サクハ無イノデ之レガ最モ大ナル所デアロウ。兎ニ／角ク朝起キト云フ事ハ必度アル可キ事ダ。充分活動／スルニハ早ヤク起キ無ケレバナラナイ。冷タイ透キ通フル様／ナ潮ニろヲ漕ギ、露ガキラキラスル小道デ百姓ノ／小児語ルノハ如何ニ愉快ナ事デハ無イカ。画ヲ画／ク他ニ之レダケノ愉快ヲ得ル事ハ実ニ感謝ニ耐ヘ／ナイ事ダ」之レハ船中ノ感デアル。／我家ニ帰テカラノ心ノ落チツキト嬉サハ書カズトモ／知レテ居ル。お祖母サンハ未ダ中々おマメデ在ル／丁度竹原カラ公資伯父サンガ来テ居タ。其ノ話デハ／小笠原ハ中々面白ソウナ所デアル。／帰タ当分ハドー云フモノカ繪ハ画キ度クナカッタ。一週間バ／カリ立テ、自画像ニ取リカヽッタ。庫ノ中ヲ画室ニシタガ後／ニハ暑クナッタ自画像ヲ画キ上ゲテカラハ此所ハヨシタ。／人体ハ小供ヲ木炭デ二日程ヤッタ。肖像ハ多ク画イ／タ自画像ノ外ニ父上ノヲ十二号デ、ソレカラ学校デ原田／先生[2]ノヲ一十日バカリデ画キ上ゲ持テ居タ粗末ナ金縁／ヘハメテ裏面ヘ先生ニ呈スル由ヲ書キ添ヘテ送ラシタラ先／生ハ非常ナ悦ビデアッタソウナー尚ホ母上ノヲ画キ出シ／タガ休暇モ残

リ少ナニハナルシ絵具ハ無クナルシ、ソレニ広島／ノ方ヘモ行キ度イノデ落チツカズ遂ニ中止トシタ。風景／ハ余リ多クヤラナカッタ。油絵デハ桃畑ノ八号一枚ノ／ミ。水彩デ三津口ノ朝ヲ画イタ　朝四時頃迄ニ海辺迄出／カケルノデ一寸ツラカッタ。豊田郡ノ本郷ヤ赤崎ノ方ヲ画ク／ツモリデ要塞ノ許可證ヲ受ケタガ□□ガ無イノトソレカラ戰争中／デ露探々々ト騒イデ居ル時デアルカラ落チ附イテ画ク事モ出来／ナイダロウト思ッテ来年ヘ残シテ居イタ。農家ヲ一枚／小サナスケッチ二三枚。／広島ヘ往タノハ八月ノ末、廉平兄ハ千葉ノ隊ニ居ルシ／米国ノ話ガ聞カレルト前ニ思テ居タガ当テガチガッタ。／岡田先生カラ教ハッタ小林万古ト云フ人ヲ訪問スル為／メニ地御前ヘ往タ。ガ二月ニ広島ヘ家ヲ持ッタトノ事デ／帰ッタ。其ノ日宮島ヘ渡リ延年祭ノ玉取リヲ見タ。翌日／氏ヲ猿猴川ノ傍ノ画室ニ訪ヒ会テ話シ絵ヲ見テ来タ。／外国デ画イタ男子ノ裸体ハ甚ダヨイト思ハレタ。然シ日／本ノ景色ハ見ルニ足ラナカッタ。殆ンド素人ガ画イタノデハ／無イカト思ハレタ。Decorativeノ方ヲ研究シテ居ルラシイ。／山中種吉ト大元二平ヲ豫備病院ニ訪フタ。／内海ヘ帰テカラハ絵ハ画カナカッタ。ソシテ五六日遊ンダ／後チ九月ノ六日ニ再ビ二人デ上京ノ途ニツイタ。／八日　夜下宿ニツイタ。

十日土曜日。晴。九時過ギ両国カラ汽車デ／津田沼ノ兄サンノ聯隊ニ行ッタガ演習デ居ナイ。宿ヲ／聞イテやつト云フ所ヘ往ク。鏡姉サンガ居タ。夜ニ入テ／兄サンハ帰タ。色ハ眞黒デ鼻ノ下ニ髭ガ生ヘタノデ全ク／軍人ニナリ二ヶ月程前ニ米国カラ帰タ時ノ風ハ少シモ残テハ居／ナイ。中々骨ノ折レル事デアロウ。十一時帰ッタ。

十二日　月曜雨。今日カラ学校ニ行クノデアル。学／年ノ始メデアルカラ、早ヤク行ク。二年ニナッタノデアル。自分等ノ／級ハ十四名ニナッタ七人落第シテ去リ一人来タ。同ジク首／席ニハ居ルガ満足ハ出来無イ。卒業生ノ自画像ガ二階ニ／アルノデ見ニ往タ。実ニ非度イ。今年ノ卒業生クライツマラヌ／モノハナカロウ。（後略）

十七日　土曜。暴風。学校デハ昨日メートルガ来タシ／Drawingモ昨日デ仕上ゲタカラ今日ハ遊ブツモリデマリー[3]ヲ水／彩デスケッチシタ。帰途五号館ヘ立チ寄タ　ソレハ来ル二十日／過ギニ開会スル筈ノ白馬会ノ絵ヲ見ニ往タ。未ダ見ル程／ノモノハ無カッタ。午后岡田先生[4]ヲ訪フタ　休暇カラ帰テ／初メテヾアル。先生ハ今年ハ大キナモノハ出サナイトノ事デ左ノ／女ノ顔トパステルノ風景画ガアッタ。此ノ風景ハ実ニ良カッ／タ　例ノ赤イ屋根ガ林ヲ透シテ見ヘルノデアル。暫時シ／テ帰タ。帰リ途ニ中西屋ヘ寄テ“Meaning of Picture”／ヲ買タ二円七十五銭。此頃ハ毎日Self helpヲ読ン／デ居ル。

十八日。日曜。晴。一番町教会ヘ行ク前ニ植村／先生ノ宅ニ行ク。先生ハ早ヤ会堂ニ行カレタ後デ奥サン／ガ出ラレタ。途中榊君ニ遇タ。快活ナ面白ソウナ少／年ダ。会堂ニ入ルト例ノ如ク一種ノ気ニ打タレル／実ニ会堂ノ居ル時ノ気持ハ何トモ云ワレヌ快イ静カ／ナモノデアル。

十九日。月曜。雨。学校ヨリノ帰途思イ／起コシタノハ「母無キ子及ビ母無キ子ノ父」ノ画題デアル／嘗テ“Ma□□□less”ト云フ画ヲ見タガ今マ自分ガ思フノモ／之レニ能ク似テ居ルノデ只ダ其ノ子ノ父ハ一人ノ画家ト云／フノデアル。「左ノ手ニハ六七歳ニナル小児ヲカヽエル様ニ／イダキ右手ニハ筆ヲ持テカンバスニ對シテ居ル悲シミニ充／テル眼光ハ鈍ク、凡テ身ニモ勢ガ無イ。小児モ力無キ／目ヲ擧ゲテ父ノ画ケル絵ヲ視ツメテ居ル。父モ子モ其ノ／左ノ顔ヲコチラニ向ケ総体ニウス暗イ中ニ此ノ二人ノ／顔ト子ヲイダケル父ノ手ガ稍々白ロク現ハレテ居ル／父ガ画ケル繪ハ何デアロウカ能クハ知レナイガ或ハ／彼ノ子ノ母カモ知レナイ。」

二十日　火曜日　雨　メートルガ学校へ来テ／Drawingヲ見テ往タ　昼食後五号館へ行ク。白馬会／ガ開会前デ準備シテ居ル　明日カ明後日カラカ開会／デアロウ。壁ニ立テカケテアッタ絵ヲ見テ来タ中ニハ中々面白／イノモアッタ。ガ後日揃テカラ自分ノ考ヘヲ起スコトニシヨウ。／今日ハSelf helpデWilkieノ所ヲ読ンデ甚ダ面白／カッタ。

三十日　金曜日。今夕愈々今ノ駿河台／ノ下宿ヲ辞シテ上野春木町ノ亀井方へ引越ス事トナッタ。／今度引越ス事ニナル迄随分考ヘタノデ休ミヨリヅット以前／カラヨイ所ヲ探シテ居タ。ガ別ニヨイ所モ無ク困テ居タ／ガ榎本君[5]ノ紹介デ此所ヲ得タノデアル。今日即チ九月三／十日ニ轉宿スルト云フ事ハ余程以前カラ定メテ居タ事デ／アル（何所へ行クカハ知ラナカッタニシテモ）。夕食ヲ終／ヘテ荷車ノアトヲ押シツヽ此所へ来タ。此度ハ下宿屋／デナイノデ非常ニ心持ガ良イ。

十月一日。土曜日。此所デノ初メテノ朝／デアル。昨日児玉君[6]カラ端書ガ来テ明日即チ今日／ノ朝東京へ着クトノ事デ上野停車場へ往ク。来タ。／今日ノ午後カラキオイ坂デ一番町教会ノ親ボク／会ガアル。飯田町カラ電車デ往タ。丁度植村先生ガ／話中デアッタ。公園デ皆ト話シ池ヲ廻テ吉崎君[7]／ト本郷迄帰タ。

二日。日曜日。麻布ノ岡田先生ヲ訪／フタガ留守中。教会へ往キ帰リニ月島へ廻リ／四時頃ニ帰ッタ。夕方ヨリ雨降ル。

■8日、美校・西洋画科の蒲生俊武と美術学生の集まりであるパレット会に出席。同会の目的が美術研究からはなれてきていることから、会合には益がないと感じている。

九日。日曜日。曇。此頃ハ大概六時前ニ／起キテ居ルガ今日ハ丁度六時ノ鐘ガ鳴テ居ル時デアッタ。／朝食ヲ終ヘテ直キニ岡田先生ノ宅へ往タ。持テ往ク絵／ハ休暇中ニ画イタモノデ自画像、梶本ノ顔、及ビ弟ノ／試験管ヲイヂッテ居ル[8]油絵三枚ト三津口ト黒チノ水／彩二枚。先生ハ例ノ如ク親切ニ色々話シテ呉／レラレ最後ニ自分ノ絵ニ注意ヲシテモラッタ。自画像ハ／伊太利亜風トデモ云フヨウナ画キ方デ面白イ。顔ノ陰映／ノ部分ハヨクイッテ居ル。ガ向テ左即チ像ノ右鎖骨ガ少／シク突

ピデ目立チ落チツイテ居ナイ。ソレト其所ノシャツノback／トノ境ガカタスギル。此ウ云フ風ノ絵ナラシャツハ実際白ロ／ク光テ居テモ調子ヲ落シテ画イタナラ良カロウ。鼻ノ／上ノ光テ居ル縦ノ白ロイ線ガカタク目ダツ。若シ筆ヲ／縦ニ持テ行カズ横ニツカッタナラ余程和ラカニ行クデ／アロウ額ノ光テ居ル部モ皆ナソウデス。一体ニ陰ノ／部デ例ヘバ鼻ノ孔ヤ鼻ノカゲ等ニ最少シ赤イ透明ナ／色ガ混ゼラレタラヨカロウ　目ノ縁デモ一様ニ黒ク変化ニ／乏シイ。フオンハ良クナイ最少シ茶褐色カ何カ交ジッテ／透明デアルガヨイ。梶本ノ顔、此方ガ色等ハ良イ　矢張／リ陰ノ色ガ良イ　此フ云フ外光ノ下デ画クノハ余程／研究ニナッテヨイ。度々ヤッテ見タナラ宜カロウ。試験管、／之レハ胡粉絵具デ画イタ絵ノ様ナ形ニ少シ／可笑イ所ガアル。着物ハヨイ。白馬会ヘデッサントシテ出品／シテ見タナラ宜カタロウニ。水彩ハ三津口ノ方ヨリモ黒チノス／ケッチノ方ガヨイ。私ガ思フニドーモ其ノ方ノ様ナヤリ方ノ絵／ニ趣味ガ多イ様ナ。下ノ様ナ（三津口ノ分ノ事）ノハ誰レデモ／コツコツヤッテ居レバ出来ルノデ面白味ハ少ナイト思フ。／スケッチノ方モ水ノ色ガ悪イノデ惜イ事ダ　最少シ緑／ガアッタロウト思ハレル。先生カラノ批評ヲ極ク大体ニ／書ケバ以上ノ様ナモノデアル。此ノ他有益ノ話シヲ多ク／聞タ。スリコミノヤリ方ヲ聞タ。今日は非常ニ永居シテ／客ガアッタノデ十一時過ギニ辞シタ。最ウ遅イカラ教会／ニ往クノモ止シ例ノ如ク大ヒニ論ジ且ツ談ジツ、／帰タノデアル。五島君モ常ハ余リ話サ無イ方、僕モ余程／口ガ重イ方デアルガドー云フモノカ何時デモ五島君ト／僕トガ出クワシタナラ終リ迄殆ンド間断無シニシャベリ／続ケルノデアル。三井呉服店ヘ寄テ先生ノ絵ヲ見ヨウ／ト云フノデ一時頃デアルニモカ、ワラズ入テ見タ。岡田／先生ノ元禄時代ノ女（白馬会ニ顔ダケ出テ居ル）／ヲ見タ　美シイ。ガモトヨリホントウノ絵トシテ画イタノデ無／イカラ眞面目ニ見ル事ハ出来無イ。和田氏ノオームヲ持テ／居ル矢張顔ダケ白馬会ニ出テ居ル分ノ絵モ見タ／白馬会ニ出テ居ルノヨリカ余程ヨイ様ニ思ハレ／タ。児玉君カラモラッタ林檎ヲ水彩デヤリツモリ／デ輪郭ヲトッタ。非常ニ寒ムク羽織ヲ出シテ着／タ　夜ニ入テ雨ガ降ル。新ラシキ本ヲ読ミ出シタ。

十四日　金曜日。南環伯父永眠セラル。午前七／時ノ事ナリ。寝タ所ヘ千葉カラ電報ガ来タ。

■15日、南環の葬儀に参列するため郷里に向けて出発、16日に広島に到着。18日に内海へ行き、翌日納骨に立ち会った。

廿二日。再ビ東京ヘ立ツ日ハ来タ。兄サント／二人デ、ホノ暗イ時ニ出タ。六時過ギ発車。兄／サンハ中等室デ眠テ居ラレル。此度ハ下等ノ室ヘ／入ル事ニシタ　丁度下リノ時ニモ乗タ一学生ニ遇タ。其ノ／ツレニハ一女学生ガアッタ。小説等カリテ読ンダ。二人ハ／姫路デ下リタ。名刺ヲモラッタ。後日或ハ再会スルカモ／知レナイ。神戸カラ下等室ガナイトノ事デ再ビ一所ニ／ナッタ。豊年ノ田ノ中ヲ汽車ハ走ル。

廿三日。日曜日。新橋ニハ十時頃ツイタ／兄上ハ植村先生ノ所ヘ僕ハ上野ヘ。午后兄上／ハ来ラレ種々話シテタ　千葉ヘ帰ラレタ。

廿四日月曜日。自分ハ再ビ元ノ生活ニ帰シタ／今週カラ四週間コンクルーデアル　先ヅ今週ハ男子／全身。

十一月／〇十八日金曜日。今朝六時三十分ニ廉平兄ハ／満州ヘ補充隊トシテ出征スルノデアル。ソレデ見送ル為メニ四／時ニ起キテ品川ヘ行カウト思テ目サマシ時計ヲカケテ置イタガ／三時ニ目ハ覺メタ。突然一ノ画題ヲ思ヒツイタ。『佐野源／左エ門』ガ事デアル。キラ星ノ如キ多クノ飾リタテタ武者ノ／其ノ豪慢ナル注目ノモトニアワレニヤセタ彼ハ今マ使者／ノ前ニ怪シミノ眼光ヲ放ッテ驚イテ立テ居ル。其ノ傍ニ／ハ所謂『やせたる馬』ガ居ル。源左エ門ハ上体ヲ／ヤ、前ニ曲ゲテ使者ヲ視彼ノ右手　馬ノ手綱ヲツカミ／居ル手ハ自ラ打チ□フテ居ル。傍ニ立テ居ル多クノ武人ハ／馬上ニ高ク打チ乗テ輕蔑ノ色ハ顔面ヲ蔽ヒ彼ノ肩／ハ高ク張テ中ニハ指サシ話シツ、サゲスミノ笑ヲモラシ／居ルモノサヘアル。構圖ハ源左エ門ト彼ガ馬ハ／画面ノ左向キデ全クノ横向キ、使者モ横ニ向キ之レ／ニ對シテ居ル。他ノ武人ハ皆ナ乗馬デ正面ノモノト背／面ヲ見セテ居ルモノトアッテ皆ナバックニ用ユ可キモノデアル／
而シテ此絵ハ可成簡單ニシナケレバナラヌbackノ多数ノ／武者モアマリ明ラカニ画カズ又タ多クモ画カズ　二三騎ノミ／稍々明瞭ニ画キ輕蔑セル様ヲ充分ニ現ハサナケレバナラヌ／馬ヨリ下リ其ノ手綱ヲ握リ居ル主人公ハ例ヘ身ニハ立／派ナ飾物ヲツケテ居ナクトモ圖面ヲ壓スルダケノ力（強イ／ト云フ意味デハ無ク此圖ノ眼目トスル或ル力）ヲ充分発耀／シ現ハサナケレバナラヌ。殊ニ大切ナノハ其ノ眼光デアル。眼ノ／キラメキハ圖ノ何物ヨリモ強キ力ヲモタナケレバナラヌ。此頃／丁度久米教授ヨリ顔面ノ相貌ニツイテ教ヘラレタガ其／ノ表情筋ノ働キハ主人公及ビ他ノ者ノ顔ニ最モ必要デ／充分研究ス可キモノデアル。尚ホ当時ノ服装ニツイテハ今マ／自分ハ少シノ智識モ持タ無イ。之レハ古実ニ明ラカナル人ヲ訪／フテ聞カナケレバナラヌ。兎ニ角ク此圖ヲ画ク時ニ当ツテ／此画ガ何ヲ意味スルカト云フ事ヲ取リチガヘナイ様ニスルノガ／第一デ其意ヲ発現スルノガ此画ノ目的デアル。成功／デアル。嗚呼此画ノ社界ニ出ヅル時ハ何時デアロウ／カ。五年後カ十年後カ。イヤ其レヨリ余程早ヤクハアル／マイカ。此圖ノ世ニ出デタ時　社会ノ驚キハ幾何デアロウ？／嗚呼自分ハ只ダ感謝ス。神ノ大ナルおメグミヲ感謝／セズニハ居ラレナイ。上野ノ鐘ハ四時ヲ報ジツ、／アリ　之レカラ起テ品川ヘ行コウ。

十二月三十一日。曇タリ晴レタリ。土曜日。／今年ノ最モ終リノ今日ニ当テ暫ラク日記ヲ書カズニ居タ其間ノ事／ヲ一所ニツヾメテ記シテ置コウ。十一月ノ半程カラナノデ書ク可キ事モ随／分沢山アルガ早ヤ忘レタ部分ガ多イノデ單ニ記臆ニ残テ居ルモノ／ダケヲ記ソウ。／先ヅ今年ノ白馬会ニツイテ云ヘバ。今年ノハ昨年ニ比シテ／余程ヨイ。昨年ハ別ニ目ヲ引ク程ノモノハ無カッタト思フガ今年ハ／白馬会ノ為メニ製作サレタモノデ注意ス可キモノガ多カッタ様／デ茲ニ最モ注意ス可キ現象ハ美術家以外ニ大ヒニ西洋／画ヲ歓迎スル者ガ多クナッタ事デ今年ハ諸新聞諸雑誌ガ／皆ナ白馬会ノ絵ニ批評ヲ加ヘタ。本当ニ其ノ批評ヲ出サ／ナイノヲ恥トスルト云フ様ナ風ガ見ヘタ。モトヨリ随分馬鹿／ラシキ評ヲ書イタモノモ多カッタガ然シ乍ラ中々適切ナ評モ／多ク余程絵ヲ見ル目ガ備ワッテ来

タ事ト思ハレテ心中愉／快ヲ感ジタ。昨年ニ比シテ賣約済モ多カッタガ皆ナ然ル可キ／作ヲ買テ行タノモ面白カッタ。今マ目録ヲ開イテ其ノ中デ／殊ニ注目ス可キ分ヲ順次ニ評シテ往コウ。(42) ノ三原山／（和田三造）ハ中々ヨカッタ最モ近景ノ山ノスソ野ノ青キ暗イ所ガ／ヨカッタ。ガ上部ノ蒼空ノ色ガ余リ單調デ透明ナル趣／キガ無イ。只ダ塗テシマッタト云フ風デ。此ノ圖題ヲ撰ンダ所／ハ余程面白ロイ。同ジク和田ノ（41）ハ牛ヲ□イタノデ一寸目新／ラシク見ヘタガcompositionガナッテ居ナイ上ニ中ニ入レタ人物／ガ実ニ無意味デ只ダ何デモ無ク風俗ヲ説明的ニ寫シタニ／過ギナイ。頭アル画家ノスル事デハ無イ。大サモ一寸大キイノデアルガ此／位ノモノヲ画クノナラ最少シ考ヘテ充分骨ヲ折ラナケレバナラナイト思フ。／熊谷ノ（54）自画像ハ中々ヨイ　之レハ以前記シテ置イタ事ガ／アルカラ茲ニハハブク。(64) 平井ノハ板ペラデアル。中々熟練シタ／モノデ沈ンダ色調トカルク画イタ所ハ実ニウマイモノデアル。ガ／同級生一般ノ曰クニハ平井君ハ板ペラハ実ニウマイガ少シク大キク／ナルトドーモイケナイト実際斯クアル様デ此ノ度モ大キナモ／ノ（ト云テモ僅カ十二号）ハ実ニ比ベモノニナラナカッタ。板デ練習スルノ／モ考ヘナケレバナラナイ。(71) 中沢ノハ海水浴ヲシタ男ガ船ノ中ニ横／ハッテ沖ヲ眺メテ居ル所。之レハ随分評判ノヨカッタモノデアル／ガ僕ハドーシテモ其ノ評判ニ一致スルワケニ行カナイ。実際／物ハヨク寫シテアッタ方デアッタ。中々正直ニカルク寫シテアッタ。ガ／チットモ僕ニハ面白ロク感ゼラレナイ。只ダスタディートシテ画カレタノ／ナラソレデヨイガ繪トシテハ実ニ可笑シイ。少シモ力無キ不意味／極マルモノデアル。ソレニ僕ハ斯カルヨワキ色調ハ大キライデ／力ノ入テ居ナイノモ一ニハ其レニヨルノデハ無イカト思ハレタ。(75) 関／谷ノハ一小品ニ過ギナイガ実ニオチツイタモノデ僕ガヨク／云フ意味ナルモノハ此絵ニハ大ヒニ現ハサレテ居ル様ニ思ハ／レタ。此ノ最モスキナ所ハ色ノ沈ンダ暗キ所デアルソシテ／暮レテ行タ空ノ色ヲ反射セル水面ハ実ニ静カデ如何ニモ／深巌ナル湖ノ意味ガ現ハレテ居ルト思タカラデアル。茲／ニ可笑イノハ其ノ隣ニ懸テ居ル同人ノ作デ殆ンド同人物／ノモノトハ思ハレナイ程拙。コレデ見ルト前ノハ只ダ／偶然ニ生ジタ結果デハナイカト疑ハス　別ニ考ヘアッテ画イタ／モノデハ無イデアロウト。次ニ記ス可キハ長原氏ノ作ダガ別ニ／少シモ注目ス可キ故デハ無イノデ如何ニ其ノ拙ナルヤニツイテ不思／議デアルカラナノデアル。長原氏ハ少ナクトモ白馬会デハ第二流／ニ置カレテ藤島氏等ト同等ニ見ラレテ居ルノデアル。ソレニ其ノ作／ハ見ラレナイ何レモカタクテナッテ居ナイノデアル。(85) ノ板ペラハ／ヨカッタ　隣リノ同人ノ作（86）つれづれハ中々大キイ作ダガ無／意味ノ極デ少シモ面白ロクナイ。(100) ノ板ハ岡田先生ノ作／デ例ニヨッテ色ガ実ニヨイ（101）ハ同ジク色彩ノ美シキ事実ニ／驚クバカリデアル最モ其ノバックガ気ニ入テシマッタ　又タ顔ノ／陰ノ色モ実ニヨイ。顔モ生キくシテ光リアル眼ハ輝ヤイテ居ル。／（102）先生ノ作ノ中僕ノ最モ好キナモノデサマデ大キクナイガ黒／キ梅ノ株白ロキ櫻ノ幹、熟練シタモノデ冬ノ意味ハ充分デアル／空ト林トノ境界ガボーットシテ実ニヨクユー和シテ居ル。(105) ／和田氏ノ作ノ中之レヲ最モ好ム　黒イオチツイタ色ノ肖像ハ／実ニヨカッタ。(107) お七吉三ハ今年ノ最モ評判物デ凡テノ／批評ハ之レヲ中心トシタノデアルガ不幸ニシテ賞ナル評ハ少ナ／ク批難バカリト云テヨカッタ。実際ソレハ本当デ僕等モ／感心シナカッタ。モトヨリ衣服等ノカキブリノ手ギワハ実ニ／ウマイモノデ骨モ折テアッタガお七ノ顔ノexpressionガ／実ニ失敗ニ終タノデアル。カ丶ル画題ヲ撰ブノハ中々面白／イ事デ（僕ハ

カヽルモノハ撰バナイガ）中々熟練モ入ルデアロウ／ガ然シ最モ大ナル根底トナル事ハ意味デソレガ力ト／ナッテ働クノデアル。デアルカラ表情ノ必要ナルハ申スマデモ無イ。ソレニ／僕ガ思フニハ和田氏ハ表情ニツイテハモトヨリ骨ヲ折タ事デアロウガ／凡テ周囲ノ事例ヘバ衣服等ニモ非常ニ力ヲ費シテ為メニ／絵ノ主眼トスル□ガ留守ニナッテ本来末ヲ誤タデハナイカト云フ／様ナ結果ヲキタシタ。デアルカラ絵ハ随分美イシモノトナッタ／ムシロ美麗過ギテ三井ノカンバント曰フ風ニ流レタノハツマラヌ／事デアッタ。全体ニ於テ安スッポイモノト思ハレタ。(112) 黒／田メートルノ肖像ハ感心デキナイヤタラニ筆技ヲ見セヨウトシタ／カノ如ク面白ロクナイ。物質ハ少シモ現ハサレテ居ナイ殊／ニ洋服等ハヒドカッタ。只ダヤヽ顔ニ力ガ入テ居ル所ヲ／トル。(116) シギト竿板ペラデアルガヨカッタ。小林万吾／ノ作ハ実ニ馬鹿ゲタモノデ見向ノモイヤデアッタ。お／話ニナラナイ。頭無キ画家中ノ頭無キ画家ダ。(124) 藤島／氏ヨカッタ。一体今年氏ハ小品ノミ出シタ。デ却テ成功／シタノデ思フニ大作ヨリハ小品ヲ画イタ方ガ氏ノ為メニハ良／イト思フ。概シテ誰レデモダガ腕ノ力モ無イクセニヤタ／ラニ大キイモノヲ画クノハ愚ノ極デ小品ニ力ヲ注グ／ノガ最モ適当デアルト思フ。(125) ノ女ノ肖像モヨカッタ／ (127) ノ女ノ横顔デ赤イゆりカタカラツケテ居タノハ最モ／ヨカッタ。橋本邦助ハ多ク画イタガ実ニ不□ナモノデ其内 137／デアッタガ婦女ガ花デ絵ヲ画イテ居ルトカノ分ガ最モイヤデ／其ノ顔ノ色タラ二目トハ見ラレナイ様ナ悪感情ヲ與ヘル色／デアル。(143) カラ149マデノ戸田謙二ノ画モ実ニツマラ／ナイ 昨年デアッタカ一昨年デアッタカ白馬会デ見タ谷中辺ノ絵ハ実ニ／ヨカッタガ今マ米国ニアル彼ノ画トシテハ実ニ可笑ナモノデアル。中丸／ノモザイックハ中々面白イ。大理石等ノ敷石ガ最モヨカッタ。／ (150) ウキッツマンノ霜景色ハ中々ヨイ (151) 同婦人ハ馬鹿ニ／キレイデアルデチリメンノ友ゼンノ様デアル。絵トシテハドーダカ。／ (152) ウキッツマンノ絵ハ水等中々キヨウニ画テアル 柳ノ葉ノ色／ト其ノ幹ト煉瓦家ノ距離ガウマクツイテ居タガ家ノ屋根ガ／ドーシテモ無イトシカ思ヘナイ。(153) 夫人ノ作ハヤハリハデナ色／デ一寸面白イガ遠近法ガアヤシイノデ不安心デアル。筆ヅカイ／ハ中々面白イト思タ。兎ニ角ク夫婦シテ白馬会ヘ出品シ／タノハエライ。一体ニ白ロイ絵デ更ミガナイ様ニ感ゼラレタ。／ (154) (155) ケノツフノ作ハ水彩ノ画テ小品デアル。(156) ／コロー模寫、寫眞デ見タヨリモ前景ガ黒過ギル様、以前／太平洋画会デ鹿乃子木ガ出シタコローノ模写トクラベルト／余程ヨイ様ニ思ハレルガ然シドーモ何トナク満足ガ出来／ナイ。到底コローノ如キ人ノ作ハ模寫シテモ寫シトレナイノデ／アロウ。158ハ157ヨリモヅット小サク板ペラバカリデ／アルガ非常ニ好キダ。(161) 老婆ハ実ニヨカッタ。可惜／筆者ガ不分デアル。其ノ淋メシキ色彩、黒イ鼠色ノ濃イ黒イ／様ナバックニアマリ白ロクモ無イ又タ血ノ気モ少ナイ横向／ノ老婆ノスガタ実ニヨカッタ。ヒタイ、目ノ辺、アゴニ於ケル／シュワト肉附ケハ実ニウマイモノデイカニモ皮膚ノ下ニハ／ヤワラカナ肉ガアルカノ様ニ思ハレタ。八号カンバス程ノ／大サ。(162) ハ□ノトウノ家ノスケッチモヨカッタ。丁度前者ト同／ジ様ナ趣ガアル。特別室ニ入テ見ルト五点シカナイ（目録／ニハ四トアルガ後ニ一ヲ加ヘタ)。岡田先生ノ裸体女ガアワ／向ケニコロンデ居ル絵ハ一体ニ非常ニ白ポク、夢ノ如キ感ガ／スル。同氏ノ泉水ハ泉ノ女神ガ森ヲバックトセル所ニ瓶ヲ／カタ向ケテ居ルノデ其ノ瓶カラ泉ガ湧イテ居ル。例ニヨッテ色／ハ実ニヨイ。殊ニ其ノヒザニ懸ケテ居ル布ノ紫色ガ実ニヨカッタ／バックノ青イカスンダ森ノ色ト白イ淡黄イナ女身ト紫

ノ／布トノ調和ハ何トモ曰ワレナイ。只ダ女ノ顔ガドーモ女／神ノ如キ神々シキ相ヲ有シナイノガ欠点ト思ハレル。橋本／ノやすらひハ実ニ見ルモ不快ナモノデ眞赤ナイヤナくナ／女ガ青イ華ノ中ニコロゲテ居ルノデユデダコヲ野ノ中へ曝／シテ居ルカノ様。青木ノ海ノさち、実ニヨイ。感心ノ外／ハナイ。漁夫ノ数人ガ手ニ手ニモリヲ携へ捕へシフカヲ／或ハカタニ或ハモリニカケテ　カチドキアゲテ帰テ居ル其ノ／形ハ本当ニ感心ノ外ハナイ。実ニヨイ裸体画デ／アル。シカモ決シテ寫実的デ無イ所ニ大ヒナル神秘ガ／コモッテ居ル。バックハ金ヲツカッタ。海ノ色ハアクマデ青ク／画カレタ。此絵ハ未成デアル。モシ出来上タ後ニモ尚ホ／今アル程ノ力ガアッタナラ実ニヨイモノデアロウ。兎ニ角ク／Compositionトシテハ場中第一否ナ今迄ニ我国ニ／無イ程ノヨイモノト思フ。compositionト絵ノ気持、／意味ハ実ニ立派ナモノデアル。伊太利古畫ノ／ノ裸体ハヨク画テハアルガ面白味ガ無イ様ナ。肉附ケハウマイ。／（166）山本森之助ノ暮レ行ク景ハ白馬賞ヲ得タガ中々ヨカッ／タ殊ニ空ノ色ガヨイ。赤イ夕陽ノ光ヲ帯ビタムクくト水／平線上ニ浮ビ出タ雲ノ峯ハお得意ノモノデアル。実ニ熱／心ニ画キ上ゲタモノデ一ツノゴマカシハ無イ。三宅氏ノ作ノ／内デハ（186）ノ暴模様ガ最モヨカッタ。ワットマン十六切／位ノ小品デアルガ色ノ点ニ於テ最モ面白ロイ雲ノ破レ／目ガ殊ニヨイ。（185）モヨイ画デアッタ前者トヨク似タモノデ大／キイ。空ノ赤クナッタ雲ノ色ハウマイ。只ダ前景ガカタクアマリ／拵へ過ギタカノ様ナ。（184）デアッタカ一バン大キイモノデ油／絵ノ様ニカイタモノ。之レナラ何モ水彩絵具ヲ用ユル必要ガ／無イ様ニ思ハレタ。水彩ハ油絵ヨリモ余程異ナッタ方面／ニ於テ趣味ヲ有スルモノデアルカラ油絵ヲ模スル事ハ入／ラヌ。（201）岡田先生ノパステルハ家屋ノ壁ノ色黄色／ナ、マーNaples yellowト云フ様ナ暖カナ色デ何トモ曰／ハレヌ愉快デアルグリーン色ハヨイ。赤イ屋根モシャレ／テ居ル。橋本ノ水彩（205）（206）ハ一寸キヨウニカイテ居ル／ガ少シモ重ミガナイ。波ノ散テ居ル所ガウマカッタガ／馬鹿ニ浅薄ニ思ハレタ。此ノ位ニシテオコウ。／二十四日ノ夜一番町教会ニクリスマスヲ祝シニ出タ　弟ト蒲生／弟君ト共ニ。面白カッタ。

明治三十八年一月一日。日曜日。快晴。／僕ハ非常ナ希望ヲ持テ新年ヲ迎カヘタ。今年ハ活動ノ域／ニ入ル年ダ。僕ニトッテハ大作ヲ画クツモリデアル。先ヅ三／ツホド考ヘタ。（之レハ早ヤ凡ソケントーハツイテ居テ昨年カラ／期シテ居ルノデアル）。“燈台ノ番人”ト“勞働”及ビ“樋守”／デアル燈台ノ番人ハ春ニナッタラ直キニ取リカ丶ルハヅ／後ノ二ハ来ル夏休暇ヲ應用シテ、内海デ画クツモリ。／雑煮ヲ食テカラ岡田先生ノ所ト三宅先生ノ所へ行タ／帰ル。

四日。水曜日。晴。／今日カラ彫刻科ノ武田君[9]ガ来テ油土デ僕ノ／肖像ヲヤッテ呉レル。十二月ニ油絵デ彼ノ肖像ヲ／画イタカラナノデ。交換ノ約束ヲ結ンダ／此頃毎度かるたヲヤッテ大ヒニ遊ンダ。

五日　木曜日。快晴。／燈台ガ見タイノデ朝カラ羽根田へ出カケタ。十二時／頃ニ向ヘツイテスケッチヲヤッテ帰ル。燈台ノ番人カ／ラ絵ヲ頼マレタ。画キ上ゲタラ其レヲ持テ再ビ訪／問スル約束ヲシ、其ノ時ニハ　トマリガケデ来イナドト親切ニシテ呉レタ／東京ニ帰タ時ハ既ニ六時頃。夜ノ市中ハ

中々ニギヤカ。旅順／陥落ヲ祝スル為メデ。

三月十一日（土曜日）クモリ。／未ダ中々暖カクハ無イガ梅モ咲イタ。昨年岩村先生ト／共ニ米国ヘセントルイズ博覧会ノ審査宦トシテ渡ッタ大村／西崖氏ガ先日帰國シテ今日ノ午后カラ談話ガアル。今／日ハ米国ノ事ダケノ話シデアッタガ中々面白カッタ。彼国／ヘ渡ル事ヲ大ヒニ励メラレタ。金工等ヲスル人ハ実ニ易ク生／活ヲナス事ガ出来ル　又タ絵ノ方モヨイ都合ガアル。ト云フ／ノハ五十枚ナリ百枚ナリノ絵ガ出来タナラ之レヲ向フヘ持／テ行キ小サナ町等デ展覧会ヲ開クノデソウスレバ中／々当テ多クハ賣レテシマウソウダ。額縁ノ如キハ皆ナ向／フカラ都合好クカシテ呉ルトノ事デアル此法ヲトッテ金／ヲ造リ勉強シ又タ欧州ヘ渡タ人ハ甚ダ多イ様デ大／テイハ失敗シタ人ハナイトノ事デ非常ニ都合ノ好イ／話シデアッタ。

■17日、南廉平の母らが広島から上京。新橋まで迎えに出る。

廿二日。水曜日。昨日カラ初メタ学校ノ鋳金場[10]／ヲ油絵デ画ク為メニ九時過ギ出カケタ。／来ル四月ノ一日カラ学校デ成績品展覧会ヲ開ク事ト／ナッテ今日カラ土曜迄郊外寫生デ実技ハヤスミ。／南ノ一行ハ今日迄神田ノ宿屋ニ居タガイヨく船／橋ヘ引キ越ス事トナッタ　伯母サンハ着京ノ翌日カ翌々／日カラデアッタカ伏サレタ。風邪ト勞レデアロウ。僕ハ殆ン／ド毎日往テ見タ。今日午后三時過ギノ汽車デ出ル／トノ事デ往タ。伯母サンハ昨夜頃カラ快ク今日ハゲン／気ガヨイ。実ハ□□文舘中学ヘ新ラタニ入ル為メニ／受験中。今日ハヨク出来タト悦ンデ居ル。／之レハ本日ノ事デハ無イ。数日前ノ話シデアル。黒田教授ガ／ヤッテ来テ某ノ絵ヲ見タ時ノ話。「色ハ少々マチガッテ居テモ／寫生画トセズ絵トシテ見ルニハ少シモ差□ハ無イ。／タトヘ此ノ赤色ガ（コスチューノ着物ヲ指シテ）少々ドーナッテ／モ、マー之レヨリ黒ヅンデモ又タ黄色ガ勝テモ絵トシテハ／少シモカマワン。ガ調子ト云フ方カラ曰フトソウハイカン。調子／ハ少シモクルッテハイケナイ。調子ガクルッテ居テハ決シテ見ラ／レナイ。例ヘテ云フナラ其處ノ着物ノ青イ花ノ色ハ明ルイ所デ／アルノニ陰ノ色デ画イテアル。ダカラ調子ガクルッテ周囲ガ／明ルク出テ其ノ模様ダケ離レテシマッテ居ル。ダカラ矢張／其ノ青イ色モ明ルイ調子ヲ持テ往カナケレバナラン。シカシ／色モ調子モ決シテ一方ニカタヨッテハイカン。本当ニ実物ヲ研／究シテ其ノ通リニ画クナラ両方ガマチガワナイ様ニナル。……／ガシカシ其レモドレダケヤッタナラ本当ノモノ、様ニ見ヘルカト云フ／程度ハ決シテ分カルモノデハナイノデ自分デ出来ルダケヤルノダ。／マーーッ例ヘヲ引クト村上君ノ絵ダナ。アノ画キ方ハ自分ノ／製作トシテヤッタノナラ宜イガ研究ノ為メ即チ本当ヲ寫スト／云フ方カラ云フト決シテヨイ事デハナイ。ダカラ学校デハヤハリ研／究デアルカラ本当ヲ寫スト云フ方□ヤッテモライタイ。デ学校デ／スル評ト又タ製作ヲ批評スルノトハ自ラ別ガアル事デ／アルカラ、製作ノ方ナラドンナ事ヲヤッテモカマワナイ。其ノ内ニ／自分デ発見スル所ガアッテ自己ノ特色ト云フモノニナリ、「自分／ニハコウ云フ風ニ見ヘル」トカ何トカ云テ世ヲ渡ルノデアル／何ニ皆ナ其ノ位ノモノダ。

四月一日。土曜日。雨。／彫刻科の武田君ハ毎朝ヤッテ来テハ油土ヲ捻テ居タガ愈／々今日キリデ終ル事トナッタ。日記ヲ見ルト一月ノ四日カラナノデ／殆ンド三ヶ月ニ渡タ　但シ随分途中色々ノ妨ゲノ為メニ休／マナケレバナラナカッタガ学校へ出ル前ノ一時間（八時カラ／九時迄）ヲ利用シテ怠ラズ来テ呉レタ武田君ノ勉強ハ実ニ／感ズ可キデアル。三ヶ月ニ渡タト云ッテモ実際時間ニ直シ／テ見タラ四十時間位シカ無カッタデアロウ。後ニハモデルモ中々／ナレテ来タ。デ座テ新聞ヲ読ンダリ談話シタリ又タ茶ヲ飲ン／ダリシテ居ルノデアルカラ楽ナモノデアル。毎朝二人ノ間ニ交サ／レル談話ノ題目ハドンナモノカト曰フト、勿論美術ニ関／シタ事ガ大部分デ時ニハ文学カラ道徳等ニモ及ブ。武／田君モ僕ト同ジデ勉強主義デ浅薄ナ天才論ハ共／ニ採ラナイ。今朝ハ僕ガ l'art pour artヲ非度ク批／難シタ。此ノ□本主義ハトテモ吾人ヲ満足セシムル事ハ出来ナイ。／若シ單ニ只ダ美シケレバ其ノ意ハドーデモヨイト云フ事ナラ其レハ／実ニ浅薄ナモノデ又タ下劣ト云ハナケレバナラヌ。現今ノ／佛国画家ノ画クモノハドーモ美シイハ美シイガ深遠ナ趣／ムキガ無イ、等ト気焔ヲ吐イタラ、武田君モソーダ我々／ガ斯ウ技術ヲ一生懸命ニヤッテ居ルノハ之レガ目的デ／アルノデハ無イノデ後ニ現ハサントスル自分ノ思想ノ為メノ手／段トスル為メデアルト答ヘタ。アトリエノ話、渡米ノ話シハ屢々／繰リ返サレタ事デアル。兎ニ角ク二人ノ此ノ塁ハ非常ニ親密ナ／friendshipヲ形造タノデ僕モ得難キ良キ友ヲ得タノヲ感／謝シテ居ル。／今日カラ一週間学校全体デ恤兵展覧会ヲ開ク／事トナッタ。僕ハ水彩ト油絵合セテ九枚出品シタ。一番／多数デアッタロウ。油絵は「試験宦ヲ手ニセル人」『工場』／『いもの場』『名無しの森』『静物（甲冑）』水彩画ハ「海辺」／『日ハ暮れ行けり』「赤き家」「煉瓦屋」デアル。／今マ「文豪ラスキン」ト云フ小冊法ヲ讀ンデ居ル。実ニ／ラスキンノ勢力ノアルニハ感心デアル。ラスキンガ種々ノ題／目ノモトニ趣味アル研究ヲナシテ居ルノハ彼レノ旅行／ヨリ得タ利益デアル。ドーカシテ大ヒニ旅行スル法ヲ立／テ無ケレバナラン。

五月卅日　祖母上逝かれぬ。／自分等を最も多く待ちもうけられし一人を失ひ／ぬ。悲哉。／六月一日の朝二時過ぎ其の電報来たれり。

七月／十四日。二日ばかり前より桃山の爺を頼みてモデル□て例の／倉の中に入りて画き初めぬ。此年の夏休暇には燈台／守を五十号ばかりなるカンバスに画かんとてなり。木炭画を／三日画きぬ。大工に頼みしカンバスのわく未だ持ち／来らざる故　今日はモデルをことわらむと朝向ふの／山に爺のもとに往きけり。爺は恰も谷川に下りて／赤土の窪みにたまりし水を桶にくみとりつゝありき。／太陽の光り甚だ強よく畑や森をはげしく□せり。／路はたに赤くなれるいちごをつみとりて食ひぬ。／榎本君より一昨日の事なり学校の成績を知らし／起こす。実技95、東洋考古学85、西洋考古学73、佛／語83、解剖79　体操88、にて学科の平均点は／82、実技は89なりき二の席を得ぬ。一は猪飼／君[11]なり実技の点は同じく□学科の点一点多かりき。昨／年は一の席ヲ占めたりしが今年は二の席ニなりぬ。されど／凡ての成績は昨年より□余程よかりき。

十七日。朝モデルを画きデッサンを終りぬ。爺ハ昼の食を／済まして帰しぬ。立て網を見に往くと云

ひし故なり。／昼過ぎ薬局に坐して曇りし日のそよく吹く風を／楽しめり。毎年帰省せる時ニ必ず聞く草採りの／歌聞えぬ。そは東側の窓の下にある稲田に／農女二人腰を折りて二番草採りつ、歌へるなり。／一人は稍々老ひたり。此の二人がそろへて歌ふ声／はげに譬ふるに物無く憐れなり。彼女等は只だ平然／として歌えり。されども其の音の高低と長く引くふしは如／何にも彼等の平坦々たる常に平和なりと雖もしかも常／に変る事なき貧と人の下に在りて世を送れる生活／を明らかに現はせり。歌の意は聞き取り難く或は／只だ無意味に歌えるにはあらずやと思はる、位なり。／とは曰へ如何なる楽手に斯程に情を現はすを／得可けんや。其の歌は冷やかなる形式にあらず／彼等の眞情の化して現われしは其のかすかに絶／えむか如き声すらも人の心を引くのかく甚だしきに／よりても知られぬ。／其の短かき歌のふし□中に含まれし深かき／哲理は人の詞にてはいかで説き盡す／を得むや　田の此□□の畔より彼方に再び／此方に向ひて来る。かくして往きまた帰り歌ひ合／せぬ。ミレの落穂拾ひの並べる二女よと我は思ひ／ぬ。只だ其の頭に戴ける頭巾と綴金との差あるのみ。／嗚呼其の廉なる衣にまとわれ太陽に黒くこげし／みにくき腕せる彼女等も神は尚ほかく美しき声を與へ／給へり。田の水はぬるみぬ稲の葉さき渡る風も今／まは見えずなりぬ。されど彼女等二人は尚ほ休ま／ず往きまた帰りぬ。其の歌へる歌も亦た前に変る事なか／りき。

八月四日頃、住村の集君が妹二人を連れて来たれり／あや子は十四、しき子は十なり。朝の十時頃な／りき　我は座敷の縁へ出で燈台守の絵を玄関／と座□の縁とを距つる戸にかけ其のバック／を描き居たる時に母上の声にて其の来た／りしを知れりき。好さん等と勝子にていかにも／親たしげに語り居たりしが好さんに教へられ／て我に相さつする為め座敷に来たれり。我／は何とも云ひ現はす可からざる感きて／いとなつかしく思はれ我にか、るいとこ等／あるを不思議に思ひし程なり。以前我が／伊与に往きし時にはあや子は十ばかり、式／子は四つばかりなりしが今は見ちがへ、大き／くなり美しくなれり。我は尚ホ絵筆はなたで／画き居たりしも心は絵にあらざりき。やがて／はき来し赤き袴等ときて我が傍に来たりぬ。／一こと二こと語る中に早やいとなれ来た／りぬ。／二日三日とたつ中になれる事余りに過ぎ／たり式子は中々の腕白者となりからだにだき／附き頭にぶら下りもて余す様になれり。我は、／式子よりも好子よりも綾子を最も愛せり。今ま／女学校の一年生なりと云ふ。我が倉の内に入／りて絵を画ける時彼はしばく訪ひ来たりて我が／傍にありき。学校の事友だちの事などいと親しく／物語りぬ。あや子はまた常に自分と我と其の／面かげいと能く似たるを曰ひまた幼き時よ／り兄さんに似て居ると曰はれたりと語りぬ。／六日頃竹原より夏目の伯母上来られぬ八つ／ばかりになる一雄をつれてなり。二年程以前／に東京にて別かれたるより初めてなり。今まは／うちは中々賑はしいとこのみにても五人な／り　テーブルの周囲は実に楽し。集君はする事／の今年は甚だ多しとて三四日して伊与に帰／り夏目の伯母上と一雄も亦た其後三日ばか／りして帰らる。されど尚ほいと賑はし。今年／程にぎはしき休暇は初めてなりき。

廿一日。古き友人なる貝塚君[12]より戦死せる其兄の肖／像を頼まれ居たりしが此程漸やく其ノ面のみ／描き終りたれば約束によりて之れを持ち行／き服装を寫さん為め今日広島に出でぬ。／宇品は多

くの汽船にて海は充たされたり／宇品の町も昨年よりは余程異なりて人の／往来いとしげし。昼過ぐる頃着きて直ちに／死せる人の服を飾りて寫しぬ。其ノ父母及び未亡人来たりて常に我が後ろよりながめ居たり／日も暮れて手もと薄す暗くなりたれど寫し終／らず。此の夜は此所に宿る事とせり。夕ぐれ／貝塚及び其の友なる杏家と云ふ中学生と共に／我が古く居たりし竹屋町辺を散歩す。まるで／町の様異なりて我が居し家も分明ならず／古き友二人に遇ふ共に町を散歩す。／翌日昼過ぎ帰る為めに宇品に出ず貝／塚及び杏家も共なり二人は我が話しせる／勝利軍艦岩見を呉に見んが為めなり。／煤烟にくすれる岩見艦の青き海に浮べ／る様いとおごそかなり。所と曰はず砲彈の／あと多くあるを木材もて假につくろはれた／り。烟とつの黄に塗られたるも煤の為めいと／黒くなれり。番せる水兵の白ろき事いと著しく目立／てり。夕暮れ帰る。式子にはリボン、綾さん／と好さんには絹のはんかちーふを土産にやりぬ。／好さんには青く縁取られたるもの綾子には絵□／のなりき。／早や漸やく八月も終りに近かづけり。綾さん／等も学校へ通ふ日近かければ帰る日を数へ／出す様なれり。綾子は常に我が傍に来りて／我の共に伊与に来らむ事をす、む。我も遂に／往く事を約す。いとよろこべり。此頃なりき／宗像より琴を持ち来らし二人して代るがわる／ひき聞かしぬ。琴をひき歌ふ。琴の音は我を／深かく感動せしめぬ。而して常に其の美しき琴の／音に我が画きし絵と比べぬ。我が絵のい／たく劣れるを屢々嘆じぬ。我が彼女等を／尊敬する念増し眞に愛す可き者なりと思ひぬ。／廿七日に帰る事と定め明日と云ふ日になりて竹／原の納見君[13]より内海へ往く可ければ一日待た／れたしとの端書来ぬ。翌日納見君来たれり。十二／三年目に会ひしなり。色々と物語る。

■8月28日、いとこととともに愛媛へ発つ。9月4日に内海へ戻る。

十日。今日は朝曇りたりしも昼過ぐる頃より烈しく／照りつけたり相島あたりの海の絵を描き終らむ／為めいつもの如く小供に絵具脊負わせて行く。／久しく雨降りし後なれば空気の色水の色透き／通るばかりに鮮やかなり。もを刈る小舟、白帆の船／美し。余りに暑くてかわきたり飲む可き水も無／ければ童に命じて馬の窓を取らしぷつくとか／みつ、画く。蒼き水の面に長く引きし白ろき線／は常に変り日かたむくに随ひて一面白ろく／輝やき出せり力を盡して画き終り帰る。（後略）

十二日。月澄み渡るこ宵は十四日の月なり八幡宮／の夜ごろなり。夜を蹈みてたゞひとり出づ穂の白／ろく出でし稲と稲との間の路を行けば彼方よ／り帰る人の面は月に照らされてあざやかに見ゆ／此方は暗ければ知れる人も知らずに行き／過ぐる者多し。黒き森の前に立てし幾つかの幟は／我が幼き頃に見しものと少しもかわらず宮に／上りて少年二人が烏帽子つけて垂衣を着　笛に／合わして舞ふを見る。我は其の趣むき深かきに／見入りぬ。見るもの皆な幼き時の事を思い起／こさす。／月はいよくさえたり。茶園の木の葉に輝やけり。／眠るに惜し、。

明治三十九年（1906）。／三月十八日。今日は誠に変化ニ富ミシ一日なりき。／余寒の甚だ強かりし今年も十日ばかり程まへより或る日は／寒むけれどまた或る日は暖かくなる様になりたり。／起きれ

ば近辺ノ森などぼうっと朝かすみ立ちていかにも／春の気持なり。日曜日なれば何處かに景色の寫生せん／と富本君[14]に謀る。新宿が良からむとて出づ。余程新宿に／近かき頃電車も少しはすき日比谷あたりより立ちづめに／立ちし自分等も席に腰を下ろす事を得たり。其の時車掌／「皆様別に無くなった物も御座いませぬか。今ますりが下車／致しました。今まの内ならまだ大丈夫ですが」と叫ぶ／乗りし人各々調べ見しも皆な安全なりき。自分はもと／より知る由もなかりしが富本君が手帖の端をやぶり／て余に何か記し渡せしも何の意か知るを得ざりき。／あとにてすりなる事を知らせし事分かれり。此の男はじめ／自分等と共に立ち居て甚だしく其のからだをおこしたり。思／ふに自分のホケットの内にも彼ノ手の入りし事ならむ。幸ひ／富本君に金を渡しありて何もなかりし故災難をのがる、／事ヲ得たり。之れが今日注意を引きし事柄ノ初めなり。／天気はいかにも穏やかに外套着けたるは稍々暖か／すぎたり。戸山の原の方に出でんと家のならびの裏に／入りぬ。此のあたり早や全く田舎めきて快よし。／畑に出づ。麦は勢よく其ノ強き緑の色をかわける／土ノ上に列べ、雲雀其のあたりより舞ひ上れり。雲雀の愉／快なるなき声も今年は之れが初めてにてほんとに春の／感を起す。麦畑と桑を植へし畑の中を斜めに上／る路に来か、りし時に向ふ□一人のおばあさん来か、／り自分が知って居る人では無いかと思ひしと同時に其れ／は六七年の前自分が未だ広島にありし時の教会の／傳導婦なりし鈴木さんなる事ヲ知りぬ。鈴木さんも／自分を覺え居たり。珍らしき人に遇ひたるものなり。／余りに□に別かれし人なれば何の話をして良きか／まどう位なり。六七年前と少しも変らず同じ位の年／に見ゆ自分は甚だ変りて居る事ならむ。病の為め／此の傍の桑畑に囲られたる小さきわら屋に一年余／り前より越したる由なり伯父の事伯母の事なぞ話す。／別かれて行く。自分はどーも余り突然なので不思議／の様に思ふ。右手に戸山の原ノ端ならむ見ゆ。／此所へ戸山の原の方から三脚等もてる小学生徒三／四人来たる。皆な画嚢や水筒を辨当と共に肩より／斜めに懸けたり。今ま原にて寫生し来た所なりと／云ふ。見せざるやと云えば画嚢をおさへて逃げん／とす。其ノ内ノ一人ノ怜悧らしきに一所にもう一度／原へ行かずやと誘へどとても美術学校ノ人の／お相手は出来ず。今から神社を寫生に行く所なり／とて南の方に行きかく。こちから左様ならと呼べば／左様なら、グッドバイ等生意気を曰ひつ、行く。快活な／面白き少年等なり。原に来て佇む　早や正午頃なら／むのどかわき腹すく。近處には何も店□ふ家も／無き様なり。丁度よき事には老いたるおばーさんが／細長き箱に菓子ヲ入れて賣りに来る。蜜柑欲と云／ひしに帰りてまた来たれり。風呂敷に蜜柑十個ばかり／つ、みたり。餅を食ひ蜜柑をむぎてディネーニ代□。／自分等の坐せる所は原の端の坂になりし所にて／前にはさわやかなる杉ノ若木の横ニ長く列らなれ／る森ありて日光脊面より輝し赤緑りの杉ノ葉は／余程コバルト色に化せられ和らかく恰も水の／中等に生ぜる草の様に静かに何かの拍子に溶／けはせぬかと思はれる。二時間ばかり画く後頃、風／強くふき長くなれる頭髪を快よくなぶる。／絵を画かとする人多くゆききす。／帰る事として大久保の停車場に入りて電車の来／たるを待つ。待つ人々の中に誠に美しき一群あり／き。そは七八人よりなる。二人の若き紳士をのぞきて皆／な女なり□其の内年とれる人は其ノ紳士ノ妻ならむ／其ノ妻となれる人より漸々と少しばかり幼し其の顔／にて三四人ばかりは姉妹にて最も幼き二三人は／年とれる人の子供ならむ。されば、先きに曰へる四／人ばかりの内の最も幼き人十二三才になれる／少女も此の二三人の愛らしき人等の叔母に

当れる／ならむ。此の小さき叔母さんの直き次ぎの姉さんは実に／美しき花の如き人なり十五六才なる可し。やさしき光ある黒／き円き目はラファエルメングスの處女の絵に似て尚ほ一層／上品にけ高く清らけし。處女の純潔なる目程世に美／しき者は非る可し。電車は混み合ひたり。彼の美しき人も／姉に席ヲ譲りて自分等と同じく立ち居たりしが市ヶ谷に／下車しぬ。／勞かれて帰り上衣などとりて井端にゆき水汲みて／顔をあらう気清らかなり。今夜は比留間氏の宅へ／行く筈なり。（去る十二月からマンドリンノ稽こに五人行く）／体勞れたれば今日だけは休まんかと思ひしも勇気を／出して再び家ヲ出づ。Mississippi liver waltz ヲ仕／上げ先生ノギターニつれて兎も角くも彈き終へたり。／すみて絵の話しす。比留間先生と云ふは中々／気焔家にて音楽の事など常に大ひに吹かれ／聞かさる、事なれば今日此方からも中々吹き帰／せり。十時過ぐる頃迄に及べり。帰りの途麻布の／コーヒー店ニ息ふ。此の店また中々に面白き所な／り去る日岩村先生に案内せられ来たりしが初め／てなり。此家へは画家も多く来るものと思はる。此の／前にはマンドリンをこ、にて合奏したり。（後略）

廿二日　火曜日。／文庫に入りてレンブラント全集を見る。また／コットマンの水彩画を見 心しばく移り動く。／宿に帰りしに何もなく物かなしく堪えられぬま／、出づ板に紙を押し絵具箱を用意し／たり。途に若し心ニかないたる所あらば寫す／もよからんとてなり。根津の裏らより田の畔に／出でぬ。樹は緑重もく鬱々とし雲はひく、／壓せり　我心愈々沈みぬ。田端の丘／より引き返して帰る。画く事なかりき。勞かれた／れば足休ませんと茶みせによる。少しばかりのしるしに主／婦あつく謝しぬ。帰らむとしてふと思ひ出し店に入りて／今ま求めし煙草の代をとりしやと問ひしに、否な全／く忘れ居たり許し給へと主婦答ふ。店の前を／カンバスもてる人二たり往く。／心しづむ事尚ホやまず。彼の稚き少女の事／堪えず頭をゆきこふ。少女は同じ町に住める／人の娘なり。今ま十歳ばかりならむか。此の少女は／他の少女等と異なりて何となく詩か物語等の／中にあるが如く思はれたり。過ぐる日人無き淋し／きせまき路の門　閉められたる家と家との間／に只だ獨り遊べる様のいたくいじらしく我が／心にとまりし故か。額に深かくたれ／し髪はけだかく彼女を装へり。この少女もとより／我を知るよしもなかりしが去る日音楽学校に／催しありたりし日　往来を距て、門の前に／此の少女と其の弟と思はる、幼き児を携へたる老婦／と門より出づる　美しき装せる人々を眺め居き。／其の時老ばの背にある幼き児に我れ小さき絵の表／つける手帖を與へたりしが彼の少女其の時我を知／りしならむきなうの夕そゞろ歩きせる時　路にて／多くの少女等と遊べる彼女は我を見て微笑みき。／彼の童もありしが幼ければ我を覺え居るよしもなし。／少女の名を知らず。／Meaning of Pictureを三ページばかり読み床に入り／て即興詩人を見る。頭いと重し。

七月二日。昨日夕暮に近かき頃冨本とともに／ふるさとに帰らむとて汽車に乗りしが今朝／まだき冨本と名古屋にて別かれぬ。尚ほ／他に乗せたる友ありしが之れにも大阪にて／わかれぬ。時の都合悪しければ途／中何所かに下りて半日ばかり消さんと思ひ／居たりしが幸ひ此の友の話にて住友の別／室に外国の絵を見んと決心するを／得たり。正午過ぐる頃なりき須磨につきけ／ればイーゼル等重も

きを小脇にか、え汗／ふきつ、其の荘に入れり。今の世に中／々に冨める人なれば此の夏の家もいと／美しく飾られたり。小さき戸口にたちて／おとなへば白ろき衣つけたる若者出でぬ。／われ、美術学校の者なるが、外国の／絵多くあるよし聞き及びたれば見させ／給へと云ふ彼の男しばらく待ち給へとて／内に入りしばらくしてまた出で、何か学校／の証か何か持ち給ふかと問ふ我さる／用意なしと答ふ彼の男再び入りて出で、まこと／に申し悪けれど何かしるし無くては見せ申す／事かたしと云ふ。われ、そはさる事ながら我は／わざわざ来つる事にてしるしは持たずとも／学校のさだめの衣着けたればいかにやと／云へば また彼の男内に入りて出で来て これは／例の外なれど入りて見給へと案内す。／いづれの室もいと美しく飾られたり。さるに／さの人のけわい無く何となく温かき感じ／無くさめし。人の住む可き所と云ふよりも貴き／器、絵等を置き列ぶるに用ゆる為めの場／の如し。さはあれ床の木の細工、之れに敷／ける敷物また窓のステンドグラスやモザイックの／縁等我が目をひく所なりき。去る年上野／の太平洋画会にて見たるローランスのルー／テルの絵は此所に在ると聞きつれば之れ／を見んとの願は今日此所に我を導きし／第一の原因なりき。此の絵は階上に上る／段の上に懸けられたり。我の此絵に向ひし／時恰も旧知に遇ひしが如き感ありき。場／所の悪しきはいと憾み多き事なり。寝室にて／若きローランスの水辺に女の立ちて頭を後ろに／まわして他の女の大理石に坐せるをふりかへり／ながめ後ろの暗き所に黒婢の小児をいだ／ける絵を見き。かつて雑誌にさし絵として／出でたるを見たる事ありき。其の画風は父とは／いと異なりていとやさしげなり。コランの／裸女の絵あり。やわらかなる緑の葉を脊景／に美しきばら色せる恰も眞珠の如き光を／はなてる少女衣を脱し今ま其の履をとりつ、／あるなり。かつて見しコラン氏の絵は多くスケッチ／風のものなればいと珍らしく思はれたり。／嘗て名を聞けるマリコセットのパステル画あり。／尚ほわれの最も意外に思ひたりしはモネの／風景画のありし事なり。さまで大きからざる／絵二つあり。一は其の色のやに色せるに驚け／り モネの絵はいと華やかなる たとえば／虹の色の如きものならんと思ひしに今ま／之れを見る。思の外なりき 他の一はさこそ／と思はる空の色と家屋の壁との色の調和／のいと面白ろし。紅の花つけたる／木の暗らくまた其の下の地に印せる蔭はやに／色していと快よし。此の他に黒田氏の古が／たり。満谷氏の絵、鹿之子木の模寫絵等多／かりし。之等の絵を立ちてはながめ ながめて／は立てる間 庭ヲへだてて波の音しづかに砂／濱に起これり。

■7月20日頃には松山に滞在。その後は、内海の生家で書いたと思われる8月26日まで記述はない。

九月十三日（村を出でまた東に上時／船の内にて）／いよくなつかしき故郷をたち出で／只だ独り船のへやにありて考ふれ／ば過ぎし七十日の休みの内の事ども／心に浮びて一種の云ふ可からざ／る感わき出づ。今や家庭の事など／につきての小さき不平も又た其の他の／事の心に満たざりし事ども／一切棄て去られ只だ凡ての人／のなつかしさに耐へざるなり。われは／まことに温かき愛の内ニ居るなり。／父母のいつくしみ給ふ事思ふだに／涙こぼる、やうなり。其の他も皆／なわれに幸あれといのらぬも／のもあらず。我が性の元来／いとひがめるより人の恩もよく／□解する能わざるなり。／われは近頃はじめて無我の愛は／まことに自らを幸福にすと云へる事／の理なるを知りぬ。わ

れは自らを／高ふするの賤しき心をすつ可し／われは美しき眞の愛の心をもて人に交る／可し。しかして輕浮、ヴァニティーは力を／最もそゝぎて打ちたやさゞる可からざる／なり。博愛嗚呼いかに美しき哉。／我が理想の個人主義と共に相／もとる事無くして永久に盡す可き／の道なり。否な歩む可き只だ一途な／るのみ。／思へば此の村に在りて僅かの日の／間に如何に我が為めに□／味ありし村人の多かりし事よ。／如何に我が友は我を信じ／くれたりしよ。思ひ来ればわれは／ひそかに恥かしさに耐へざるなり

■翌14日、奈良に到着。6日間滞在した。16日は聖林寺や安倍山、飛鳥大仏、岡寺、橘寺、久米寺などを、17日は吉野に向かい、吉野神社、蔵王堂、吉水神社、竹林寺、水分神社を、18日は當麻寺、法隆寺、19日は柱楽院等を訪れている。

十月。二十五日。／毎日天気が悪るいので果さなかったが、いよく今日／大久保の南から此の千駄木林町へ引きうつる／事が出来た。引きうつって来た内には六十に近か／いおはあさんと孫が三人居るばかりである。／三人の孫の父親は早や世を去ったのであらう。／兄は十九で中学校を出て会社へ出勤して居る。／妹が二人いて姉の方が十二三妹の方が十ばか／りのまだ無邪気な最中である。何ンでも余程／恐しい歴史が此の家族のうちにつゝまれて／居るのであらうと思はれる。冨本は早や四五日／程前に此所に移て来て居る。

十一月一日。／昼めしをたべてから冨本と二人で戸田の原へ行く／事にした。駒込からがた馬車へ乗った。僕等／二人が乗たので定めの人数より多くなってろく／ろく腰をすえる事も出来ず話しも出来なかった／がおりる人があってから漸うく安心する事が／出来た。御者台では笛をしきりに吹き立て車は／大きな音をしてひこじられる様にして板橋／迄来た。戸田の原は今ま葦が一ぱい生へて居て／とても蹈み分けて入る事は出来ない。丁度太／陽は大分傾いて居たから高い葦の影が小道／一ぱいに落ちて路の両側に生へた－凡ての物が／皆な黄な秋の色をして居るに之れのみ緑色を得て居／る－草は淡い淡いコバルトがかったみどり色をし／て居る。人のあるくところも何んとも曰はれぬよい／紫色をして居る。一寸二人が立ちどまって見て／居ると路の向ふの方で曲って葦と葦との間には／入てしまって居る所から農夫の女が半身だけを／日にあびてやって来た。鋤や土びん等を持て／居る。其の前の方に垂らして居る前だれが実に／よい色をして居る。茶がゝった色のとび色であった。／向の方からとぼとぼとやって来る所を二人は／スケッチブックに描て居たがもう目の前に来／てしまったものであるから急いで前かけにすじ／を引いてbの字をつけて置いた。水彩画を／しまった時には早や日は全く落ちて居てふり向／ひて地平線に沿う空の明らかな色を眺めた／のであった。しばらくして月が出た。満月が出た。／板橋迄あるいて路のほとりへ腰を下ろして乗合／馬車の来るのを二十分ばかりも待った。

十二月。ぼつく外国行の事を話し出した。兎に角く／人に話を聞くが第一と、平井、寺崎と三人／で先づ正木校長の所へ行き色々と／聞く。佛らんすか、べるぎーが良かろう／とのはなし。

十二月二十七日。今日は黒田先生の所へ同じ話を／聞く為めに前の二人の外榎本君も加わって／先生を訪ふた。僕はメートルの画室を訪ふ／たのは初めてである。丁度合田先生も来て／居て暖かいストーブをかこんで面白い／話を聞いた。メートルハ十年合田さんは八／年と云ふどちらもイーかげん巴里に居た人／だから中々話が面白ろい。メートルの説／では矢張ベルギーが良かろうとの事。／四人満足して外へ出たら月が寒むく地／面を照らして居た。／岩村先生にも同じ話しを十日程前に（中略）した。先生もベルジューム／説である。兎に角く僕はベルジュームへ／一度行かうと思ふて居る。

明治四十年。一月。／一日。昨年は信州で淋びしい正月をしたが今年は／兎に角く賑やかな所で年をとった。今の下宿／の若林と云ふ内は非常に親切なので実に面白／い。朝シルコと雑煮で腹一パイ。／トミー氏と一所ニ出る。年始に参る。大久保／にも行く。

四日。夜、マンドリン連中が岩村先生の内へ招かれ／た。所謂琉球からもらった豚の御馳走で／腹をふくらかしてイントロメッツオをひき／ナポリテンヲ歌った。森田君[15]が酔った。

五日。同連が平井君の内へ集まった。夜／おそく迄面白ろく遊んだ。

六日　今日は同連を僕等の所へ招く日だ。／皆なに豚汁を吸わしてやった。ナポリ／テンが何よりのゴチソウであった。

七日　同連が今日は森田君の所へ招かれ／た。

二月。十七日。／今日は日曜日で天気も非常によい　唯だ少し風／が強いは残念である。昨夜はいつもの様にマンドリン／の為め夜が更けて帰り今朝はまたおそく迄眠て／居た。朝飯を食べたのは十時頃であった。此の天／気では外へ出て遊んだら定めし面白い事であらう／と僕の発議で上野の動物園へ行く事となった／お藤さんにお友さんそれから主人一郎氏と富本／君と僕。天気はまことに良い早やそろく春の／香がする様な心持ちがする。面白ろく動物／園で遊んだ。僕は心から愉快であった。僕は／此頃甚だ沈み勝ちでどーも悲觀して仕様が／なかった。之れは何故かと云ふに色々理由があ／る。早や卒業も目近かに来て居てどーしても学校を／出なければならぬ　かへり見ると五年は夢の様に／過ぎ去て居る。自分の学んだ事はどの位であらうか。／絵と云ふものは実際非常に困難なものである。／今ま五年間に自分が得た事は実に僅かだ。勉強は／可成したつもりであるが斯の如くである。此頃卒／業製作の自画像を描いて居るが中々出来ない／色々と力をこめて画いてもどーしても思ふ様に／いかない。つくづく困難である事を感ずる。悲しま／ざるを得ない。先日富本君が其の友から聞いたと云ふ／僕のうわさ。どんなうわさか深かくは聞かなかったが自分／で想像して見ると随分つまらぬ事で勿論気に止め／る様な事では無いが然し僕を愉快にはさせなかっ／た。こんな鬱々した□は今日面白ろく遊んだので／すっかり晴れた様だ。今ま世話になって居る若林／家の人々は誰れも皆な

人が良くって親切を盡して／もらうので常に感謝して居るのである。実際こん／な家はめったにあるまいと思われる。お藤さんは／十二になる可憐な娘でお友さんは活溌な親切な／美しい少女で十六になった。自分は二人とも愛して／居る。特に其の境遇を考へて同情に堪へないの／である。どーか之れから先は荒き風にもあたら／ず無邪気においたつ事が出来る様にと／祈るのである。／午后依田君[16]の所へ小供が三四人来て尤も小／さいのを水彩画で描いた。夜鉄造君[17]を／訪ひ本郷迄来てビールをのんだ。

三月八日　金曜日。はれ。／午前は自画像ヲ描いた。晝飯を食て其所等／を散歩しやうと二人で出た。早やぼつく春／らしくなって空気がほかく暖たかく風もなま／ぬるい様な気がし出した。不動さんや石の／仁王の所で壁や柱へはりつけた古い札／を五六枚はぎとった古くなって中々面白／い色になって居る。どーもうまくはげないので／此の次に水と海綿を用意して来る事にした。（中略）まだ自画像をやらなければならないの／だが散歩が馬鹿に愉快になって来たので／とーとー日暮里へ團子を食いに往く事と／なった。僕は洋服に下駄、冨本君は羽織／でオーヴァーシュー、中々比較が面白ロイ。／帰りに古道具屋を見たが別に面白いものも／無かった。

九日。土曜日。はれ。／昼からまた自画像にとりかゝった。愈々期日も迫／て来た。あさって出ださなければならぬ。蒲生君／の兄さんの方が来た。試験が近かづくので急しい／相だ　此の夏には學士になるのである。／（中略）僕は額縁屋／に要事がありトミ君はマンドリンへ往かなけれ／ばならぬ。僕も行く筈だけれど今日はよした。／日比谷で別かれた。夕方から夜に入る頃は／非常に愉快なもので何を見ても実に立派な／絵だ。堀をこえて石がけに繁て居る松は／何とも曰はれないおだやかな色をして居る。／和田くら門等もまるで絵でムーッと或る／色につゝまれて居る。来週になったら是非／とも描かう。帰りも徒歩で和□楽堂迄／来たら丁度サツマびわがあるから初めてで／珍らしくは入て見る気になった。石童丸や小／楠□を三つ程聞いて筑前びわをも一つ／聞いた。中学生が重な聴てでてんでに大／声でどなる。随分演者は馬鹿な目にあう。／文房堂でカンバス、はさみと水絵の絵具をかった。／本郷の通りで絵を路ばたにさらして／いるのをひやかしてウキッスラーとレンブラントのエッチング／それからロセッチとディユーエルの素画の寫眞版を／買て来た。此の間も矢張り此所でピビュスド／シャバンヌの絵の寫眞ヲ買て来た。こんな物を／大道で賣る様になって来たのである。

廿四日。日曜日。／自分が洋行する事について廉平兄に少し話して置／いたが兄さんは昨日其れを教会の渡辺氏に話し／て見て呉れたのである。今朝まだ床を離れないで／居た時に兄さんから端書が来た。渡辺氏が昼めし／を一所に食べるから教会へ□出てこいとある。／其れで実は今日は寫眞を撮るので教会へは出られ／ないかも知れないと思て居たのであったが其の様な／都合で寫眞屋へはやく行く事にした。一郎君友さん／冨士さんそれから依田君、冨本君が国に帰て、居ない／のは残念である。本郷の望月と云ふのへ行た。／僕は感ちがひをして居た　教会の渡辺さんと云ふのは／裁判長の渡辺

さんかと思て居たら一番町の方のであっ／た。健二君の内であった。テーブルには主人主婦健二／君小さな娣君其れから僕の他には工科大学生／が一人　都合六人である。此頃になって僕は／東京の家庭の内に少しは交はる機会を得る／様になった。渡辺氏の家庭は東京に於ても／まあ第一流の階級に属するものであらう。凡ての具合が平／井君の内に非常に似て居る。日本の間と西洋の間／とが並んで置かれ客間の飾りつけ等よく似て居る。／ごはんの間は別に多く話もしなかったが済んでから／主人と二人で美術上の事など話した。後客間／で瓦斯のストーブを囲んで話した。健二君とまへの／学生及びモ一人早稲田の先生か何かして居る人も／居た。此の人は自ら英国紳士的と號して居／たが実際多方面の話しが出来相だ。僕とは／絵の話しを大分した。兎に角く今日は何となく／うれしい活きくした心もちの日であった。

六月七日。／学校ヲ卒業して四月に一應帰省した。／愈々英国へ行く事に決定した。多分此の月の内には／出るだらう。／四月頃から五十号ばかりのを初めたが座敷を新築す／るので画く場所が無くなり中止した。時々水彩で／寫生に出て居る。／〇此の近辺の景色の寫生したものを集めて画集／として出版したらよからうと思ふ。最早や余程／たまったから一冊にでもする事が出来るだらう。／“瀬戸の内海”とか名をつけ本の体さいも／充分きれいにして出版して見たい。が今まは／出発もまぎわになって居るから何れ帰朝／の後にしなければならない。今ま出して見たい。

二十三日。内海を出た。

二十四日。朝五時汽車に乗った。／朝ハ曇て居たがイヨく雨になった。気が沈んで／沈んで仕様が無い。内の事や色々の事が頭／の中へ浮び出てどーもこーもならない。京都で下／車する事にした。集一君が居るからである。／集一君と遇ひ今の心を皆な打ち明けて話した。

二十五日。集一君と市中を見物す。午后またはなす。／夜九時二十分のに乗った。

七月一日。心が沈むのは尚ほ一層ひどくなった。之れ／はいよく国をはなれて遠くへ立つ日が近かよったから／であらうか。僕は此度東京へ来る途中汽車の／内で涙を流して色々の事を考へたが今ま矢／張り其の時の通りである。今更コンナ事を云ふのは／実に女々しく自分でも馬鹿気た事だと思われる／時もあるがまたソーで無く一生懸命になる事もあ／る。其れと云ふのはコーである。自分が美術学校へ／は入ったのは勿論父の非常に嫌て居たので父／は僕の小サイ時から僕をお医者にしやうくと／思て居た。ソレを自分はまた大ヒニ嫌ってどーしても／美術家になると云って中学校を卒業す／るや否や美術学校へ入る事になった。父は此頃／非常に落たんして居たソーで今ま思ふと気の／毒に堪えられない。一年も二年もしてから矢張り／時々医学校へは入る気は無いか、どーかは入る／様にせぬかと手紙で起こした事がある。自分／は其の時はまた中々父の云ふ事など聞く様／な事では無かった。其の後夏休暇に帰って／居る時分に弟の事などで心配した事があった／が其の時に一

寸思った。父は弟についてコンナに／心配して居る。気の毒だ。僕も父の意にはさからっ／て居るし弟はまた心配さす。父の身になったら／堪らないであらう。コレは一ソの事医者になって／父を安心さそうか知らと思った。然し直きに／イヤそんな心の弱い事ではならぬ　切角思ひ立って／早や二年にもなって居ながら今から中止する様では／つまらぬ。人の手前もはづかしいでは無いかと直／きに打ち消してしまった。其の後父も最早や／云わぬ様になった　三年の時には自分は特待生／になった。父は此の時はよろこんだ。之れを聞いた／時に近頃こんなに愉快な事は初めてだと／さへ云った。自分もよろこんだ。／卒業期も特待生で今年の三月には愈々出る事／になった。自分は洋行したいとは日頃の願であった。／初めは米国へ行て勞働するつもりであった。其の後には／考へが変わってどーかして欧州に居て絵の模／寫でもして金を得て其れで研究したいと思った／之れについては色々廉平兄にも相談して運動／してもらった所模寫の話とは異なるが學資を／出してやろうと云ふ人があった其れは冨士見町／教会の渡辺氏で月に五十円つゞ出そうと云ふ／話である。が之れはどーも余り理由が無さ過／ぎ受けるわけにも行かないと廉平兄も云ふし／僕も思った。植村先生も其れは受け無い方が／よからうと云われたソーだ。之れを父に／話した。どーじゃろか。米国で金をもうけて行きませうか／と云ふも父の云ふには米国で金をもうけなどして居ては／時がかゝって仕方が無い。またヤソ教の人等に金を／出してもらうのも嫌だ　おれが三年間位の金は出して／やらう　其の変りなる可く早やく帰って来いと云ふて呉れ／た。自分は其のつもりで居た。いよく豫定して／居た日も来たので出て来た。父は三津口迄／送って呉れた。今日手紙が来たが非常に不愉快／であったと云ふて来た。斯の如く父も許す自分の／志も愈々眞に実行される様になった今となって／自分は非常に苦しみに忍えない。悲しくて／堪へない。父はたとへ許しはして呉れたが然し／美術家になるのは心からよろこんでは居ないので／勿論医者になって居て呉れたらと思って居るであらう。／弟は今ま何もせずぶらくして居る。父は年をとっ／て行く。あとを継ぐ者は無い。書生は居ない。／非常に多忙だ。さぞ他の親の業を継ぐ子／がうらやましいであらう。が自分は別に之れ／と云ふ悪い行も無いので何も云わず只だ／だまって自分のする様にさして置く。自分は／よい気になって自分の思ふ通りにしやうとして居る。／其れでは余り我儘と云ふものではあるまいか。／之れで済まうか。今になって初めてこんなに／迷う。あまりえ手勝手の様な気がする。此の／儘英国へ渡って気が安からうか。アー迷ひ方／が余りおそかった。せめても少し早やくコンナ心に／一度なればよかった。今更渡英を中止すると云ふの／も随分可笑い　どんなに笑ひものになるであらう。／新聞等にまで出てしまった後だ。と云へば父／には気の毒に堪えない。父の事を考へると胸を／しぼられる様な心持がする。コレハ一應は／洋行はやめにして尚ほ一層よく父に相談／し尚ほ父に意があれば一應医学校へでもは入／る事としやうか。医学校は三四年間位で／あるから二十八九には卒業が出来ぬ事も無か／らう。そーして一應医の業を継いで居て傍ら／絵を画かうか。どーしたらよからう。誠に心は／色々に迷よう。明朝は何もかも廉平兄に／打ち明けて云ってしまをー。

七月廿四日。／愈々今日の博多丸で英国へ立つ事になった。新橋／ステーションへは色々な人々が見送て来て呉れた。／横濱迄行て来レたのは廉平兄と武男君の外には／時永君[18]永田君[19]森田君であった。

十二時出た。／此夜少し波が立ったので大分ヨッタものが／あったらしい。

廿五日。午后四時神戸着。三菱造船所の／杉山文七氏が船迄来られ一所に氏の／家迄行き世話になった。夜 月岡眞太郎[20]／を訪ふたが出張中で留守。六丁目神戸舘／に宿った。

■26日、大阪に滞在。

廿七日。十一時に出帆で十時迄には帰らなけれ／ばならぬ。杉山さんの所へ行かなければなら／なかったのであったが時が無く直ちに船へ／来た。杉山さんは来て居られた。日高の納見君／が僕を見送る為めに来て居られ意外だ／った。或る人に依って乗客なる桑木博士[21]に／紹介された。また三潴法学士[22]にも遇った。／船は今がた今治沖を通った。極く近か／い處を通たので町の灯が実に美しく／一列ニ列らんで丁度お祭りの様だった。／大井あたりを一生懸命で眺めた。弟も／今ま住村に居るそうだから皆な愉快に／遊んで居る事だろー。キッスを送ってやった。／内海も非常に近かい父母はどして居られ／る事やらと暗の中を見つめた。二三年前／に行た大下燈台も目近かに見える。燈台の燈／が見えたり滅えたりして居る。燈台守君はどー／して居るか。実と云ふ六つになる可愛らしい子／が居たが。／冨からもらった手紙で「船瀬戸内海に入／りて君の家の横を通る時」見ろと云ふ／のを開らいた。僕が先日送った手紙の／返事だ。誤解と云ふ事ばっかり書いてある。

廿八日　朝門司へツイタ。／夜馬関へ渡って宿った。

二十九日。愈々今日日本の土地の見オサメヲするのです。／馬関から八時頃ニ門司へもどり早速本船へ／移りました。正午と云ふのでしたが遅れて／一時半頃になりました。天気は非常に／よい。馬関と門司を右と左ニ見て行き／ますと宮本武藏をどーとかしたと云ふ岩／柳島の左を通る。それから何とか云ふ爺が／秀吉の船を沈めてやらうと思って造ったと／云ふ暗礁のへりを通った　岩は見えない只だ／赤い小さな燈台の様なものが立て、ある。／本州の方の陸は小さな港を過ぎたら折れ／曲って遠くなる。九州の方はまだく遠く迄／列ては居るがボーッと見える。船はイヨく／外海に出たのでせう。船がまだ／動かなかった時に実に暑かったが今はソヨく／い、心持の風が吹く。ツイ眠気がさしまし／たから甲板へこしかけて眠てしまった。目／が覺めた頃は何んにも見えない。陸影／を離れぬ内に僕は失敬してしまったの□□／小さな島が三つ四つあった。日が暮れ／たらイヨく涼しくなった。色々な人と話し／た。海は靜かだ　玄海なだは無難らし／い。

（上海見物）／三十一日。はれ。今ますっかり海は赤くなった。どっちを向ひてもまだ／陸は見えない。今朝まだ夙く甲板へ上た時には左手に／小島の様なものも見え燈台の火も見えた。太陽が当たると／海の色は盛に赤くなる。柿色満る台湾舘の屋根の様／だ。雲の陰がうつる時には紫色の條を引く。帆船が／チラく見える。帆の形やまき方等が余程ちがって来た。／呉淞（ウンスー）で三四時

間も汐を待って揚子江の／支流に入り上海へ上る。河は甚だせまくなった。両側／の景色が実にキレイだ右手に古い呉淞の町が見／える。左手は只だ広い田である。稲か知らん緑に／遠く迄列なって柳の様に木が林をして居る。百姓／屋等が木の間から見え白ろい野羊が遊んで居たり／水牛が水縁に動かないで立って居る。四つ手網を／下ろして時々□□□と上げる。のんきなものだ。夕立が／今がたあったので南の方の空は眞黒。時々雷が白／ろく條を引っ張る。四時過ぎに上海に着いた。／（中略）東和洋行と云ふ日本人のホテルに宿った。／日本の風呂に這入って浴衣を着き日本飯を／食った。たくわんが馬鹿にうまい。／九時頃に六人づれで町を見物に出た。少し／雨が降って居たがかまわずに行く。町の光景は／実に珍らしい。中々キレイだ。三潴さんが両替屋で／銭を替へた。どの店にも非常に沢山店の者が／居る。皆な腰から上は裸体だ実に異様な感が／する。わけも無く珍らしい。まがり角では見覺を／して進む。大きな町へ出た。銀座よりも遥かに／ましだねと云ひ乍ら行く。馬車の道がついて居る／が車台は一つも来ない。賑やかな方へ方へと来る／と盛な所へ出た。（中略）コヽ／は名高い四馬路（スマロー）とか云ふ所であらう。

五日。昨夜十二時過ぎにエンヂニヤーの人が来いと云ふの／で其の室へ行く。日本酒を飲まされた。其の儘其／所へ眠る。起きて見ると頭が重い。船は少し／動いて居る。早速ともの甲板へ上って籐椅子へ／へたばったなり昼過ぎまで眠ったり覺めたり。大分／やられた。僕一人では無い。昼からまた昨夜の室／へ往た。コヽは動かない。五時頃愈々香港の／入口へ来た。気分はたしかになった景色は実によい。（後略）

六日。はれ。港へ上った。今日も同勢が中々多い。ケープルカーで／山へ上った。上から見た景色は実によい。一寸瀬戸内ノ風／だ。郵便局で内海や東京へ手紙を出した。町は盛んなものだ。／座敷の豫想外に汚たない清風楼と云ふので昼飯を食っ／た。甘い。（後略）

九日。今日は右手に陸影を近かく見る。バルチック／艦隊が立ち寄ってやかましかったカムラ湾は／其所である。乗客は皆な甲板に出て眺める。／此辺の海に飛魚が沢山居る。丁度燕が／飛ぶ様で青い波の上を波の高低に随って／水面をすべる様に船から斜めに飛ぶ／面白い。波が少し立って来た。

十日。天気が面白くない。行手は空が濁て／居る。見る内にサッと横なぐりに大粒の／なま温い雨が来た。雨足は速い。波は／大きくなった。船の動揺がひどくなった。／僕は顔を洗ったきり何も食は無い。トートラムネ／一本で一日過ごした。午后は機関士の室／へ避難に及んだ。イヤナ一日。

十一日。晴れ。起きて見ると心持が良い〆めたと／思ひ乍ら自分等の室の方へ帰る。昨日は一日食わ／なかったので腹がペコくだ。朝のコーヒも飲み／朝飯も食った。但しおかゆにしてもらった。／昨夕のテーブルは非常に淋しかったそうだ。／甲板の籐椅子に腰をかけて休／んで居る。今日は如何ですかと皆んなで云ふ。今／日ハほんとに気持が好くなった。海蛇が居ると／て皆んな海を見て居る。

僕は見る事を得なかった。／今日は日曜日だ。讃美歌を出して歌った。／太陽の直下を通過したのは一昨日だった／さうだ。シンガポールにはあすつく筈。

十二日。昨夜は余り暑かったから外で寢る事とした。毛布を甲／板にぢかに敷て伏した。が梶の機械の音が／特別に耳についてもどーしても眠られない。二時頃／になったが眠る事が出来ない。頭を横にして居ると／突然海の中に灯が動いて居る。船でも来たかと／起きて見た。傍に寝て居た新嘉坡へ行くと云ふ／繹種と云ふお坊さんもどーも眠られんと云ひ乍ら起きて来た。／灯は燈台だ。和蘭領の地にあるのだそうだ。船が／一隻左舷に近かくすれちがって往てしまった。もー港／は二三時間の内に来るそうだ。寝台を縁に近かく置い／て仰ぬけになった。暫らくすると行手にちらく灯が／見えて来た。ふと目を上げて空を眺めると一つ変っ／た星がある。長く尾を上の方に引いて居る。彗星では／無いか知らんと眺めた。昨夜の事であったが前の／坊さんと天文の話等して掃木星の話をしたが今ま其／のはうき星が出る云ふのも余りおかしい。何か知らん／と一生懸命見て居る。と誰か梯子段を上ってやって／来た。人を探す様な風をして僕の顔を窺う。斉藤氏[23]／だった。南君、はうき星くと云ふ。ア矢張りはうき星であった／か。聞けば二三日前から最早や出て居る筈で七年目／に見えるデーニングと云ふのださうだ。四時過ぎだ。／眠て居る人を起こして見せた。二人で水を浴／びた。気持が好くなった。殆んど昨夜は一睡もし／なかった。夜も明けて来た新嘉坡は近かくに来て／居る。検疫も済んで港へ入った。日の出前の空の／色は何んとも云えず鮮やかだ。雲は日本で見／られぬローズ色に輝やき、空がターナーの絵の様／に穹隆をしてこっちに来る。帆をはった小船が／静かに浮んで居る。紙や絵具を／室から運んで来た。白い建物が水ぎわに一列に／列んで居る。此所で上陸してしまう人が大分ある。（後略）

十三日。朝目が覺めると少し寒むい。／ランチから下りて五人で馬車をやとって植物園に／走る。此の路は三哩程あるさうだ。此の路が実／に面白ろい。町はづれから好くなる。道路は眞赤／だ。両側の樹木は緑色が濃い。木蔭は静かな／紫色をして居る。奈良の様だなと思ふ。草原の／上に野羊が□つも遊んで居る。林が実しく／繁って居る。松久君[24]が手を引いて注意するから外を／見ると円い木が一面に植へてある青草原の中に／白い着物の洋人の娘がカンバスの前に／パレットをひかへて居る。僕はやって居るなと思ふも／高橋氏[25]は女のくせにしゃれた事をして居るなと皆んなで／見る。緑の内に隠れてしまった。例の牛車がチリン／チリンとのんきにやって来る。馬ハ小さいが同じ速力で何所／迄でも行くと云ふ風に僕等のシャリオは走る。向から来る／馬車の御者と此っちの御者が声を一ことかけて／は行き過ぎてしまう。植物園の門で車はとまる。馬／車は路ばたの木蔭に退く。僕等は見た事のない／樹木の間の小徑に上った。熱帯の植物園だ／から僕は余程気持がちがいいかにもあつ苦／し様な植物ばっかりあるものだらうと豫想して／居たが全く左様では無く心持は非常に好く／涼しい。小鳥がひくくたれた枝から緑草に／飛び居りる。上の方にはこま鳥の様な鳴声がして／居る。如何にもよい。（中略）五時のランチで帰る。夜は涼し／い。ともの所で皆んなで馬鹿な話をする（博多会をつくる）

■14日にシンガポールを出発し、16日、カナンの港にはいる。

十七日。朝彼南の町の大時計が心持ちよく打つ音を聞いて／起きた。水彩画を一枚画いた。此所でコロンボ／迄行くデッキハッセンジャーが沢山乗り込んだ。金の／鎖へ金貨をツケ胸に下げて居る若い女も乗った。夫は／印度での紳士であらう。他の者も皆な食料品を／多く備へて居る。印度人の蛇／つかいがやって来た。喉を平らたく膨らすゴブラ／や新嘉坡の緑色の蛇等を籠の中から／出しては瓢箪の笛を吹く。横で爺が□子を／とり乍ら小鼓を打つ。手品を□ふ途中で籠を廻／して銭を取るのは日本の手品師のやり口と全く同／じだ。三時半頃船は出た。港を出てしばらく／して水先案内は水蒸汽船で帰った。／日が暮れて甲板は涼しい。（後略）

二十二日。朝飯の時船は古侖母港に入った。／波止場に打ち上げる白波は雲の様に散り、実／に壮観だ。タラ、ボンベヤが船の周囲に／やって来る。実に美しき声である。宝石屋が／沢山来る。午后上陸す。土は赤い。家も／赤い。馬車二輪でお寺へ行く。色々な物を／見せて呉れた。ビンロージか何かの葉へ梵字で／経文をかいたのを買った。お寺にはネハンがある。信人／の女が拝んで居る。壁画が好である。陳列場／に佛像の小さきもので誠によいものがあった。石／膏にとった佛像等が多くある。佛しゃりだと云ふの／を見せられた。之れは眞物ではなからう。旧市／街は家が小さくきたないが絵にすれば好いだ／ろー（中略）明日はカンデーへ行くと云ふ人が大分あるが僕／は止す事にした。此船が入港する以前／に丹波丸は既に碇舶して居た。正午前／出帆した。日本に帰るのである。

二十三日。朝起きて見たらカンデー行きの連中はもー出てしま／って居る。今日はゆっくりと水彩画でも画かうと紙をはる。／船は相変らず物賣が沢山やって来るが此所は本場／だけあって石賣が非常にやって来る。其の内でハッシー／とか云ふ男は一番確実だとの評判で買った人の名／刺を夥しくもって居る。石はさすがにキレイなものだ／殊に白い紙の中へ一握り程紅や白や緑をギラく／さして居るは感じがよい。大概買ったが僕／は遂に買はなかった。赤いコロンボの家を画いた。船に乗ってから／一番落ちついて描く事が出来た。（中略）朝此のセイロンのガワーナーが新らしく英国からやって来た。／其の船は隣の場所へ停舶した。キレイなボートで船／から陸へ上った。どの船も今日ハフルフラッグをして居る。／カンデーは大変面白ろかったさうである。丁度今日ハ陰／暦の七月十五日で日本ではうらぼんであるのでカンデー／もお祭りだったさうだ。夜一寸上陸した。町は静か／だ。月が非常によい。コロンボでぼんをしやうとは／思わなかった。内海では跳って居るだろーと思ひ乍／ら甲板で涼む。

九月一日。アデン湾が盡きた。両方から陸が見へる。めがねで／見ると、木も草もないらしい 赭の焼土の様だ。同じ色の／建物が見える。頭の重い目の重い景色だ。之れも／暫らくして見えなくなる。只だ遠くに淡く陸の頭が／見える。海は相変らずのおだやか。いるかが遠くに／居る。かもめが沢山飛ぶ。船について夜に入る／迄来た。愈々紅海には入った。暑くはあるが涼／しい。木も草も何んに

もない焼け砂の岩山が海に／のぞんで居る。建物が見える燈台がある。眼鏡／で見るが人の一人も見えない。黒いおそろしい様／な岩が見えるばっかり。此んな所でも人が住める／のか知らんと思われる。

二日。相変らず海は静か。甲板は涼しい。室内の寒暖／計は九十二度を上って居る。夕は綺麗だった。内海、／柏木、若林へ手紙をかく。

三日。昨日に比ベルト稍々暑さは減じた様でしかも好い／風が堪えず吹くので愉快である。夕は日本飯で／此度のは又た特別によく出来て居た。斉藤君と潮水を／浴びた。

四日。昨夜十二時過ぎに目があいたきり眠られない。書物など／読む。淋しき月がアラビヤの方に上って居る。四時／過ぎに、まどろむ。起きて見たら日は高い。今日も涼しき／好天気である。午前遥かの東にP.O燈台を見る。午後／brothers islandの傍を通過す。島は石で築き上げた／平ら地の様になって燈台が高く立って居る。島は日を／浴びてカドミュームに輝やき海は濃き青紫色をなし／て居る。小さい方の島には何にも無い様である。同じ／方向に馳る汽船がある。午睡をしてお茶に起き／る。夕は美しかった。黄色は漸やく変じて眞紅色／になり紅は直ちに橙々色につらなりまた美しき蒼空／に接して居る。アフリカの山の峯が頭だけ明らかに／blue色に列なって居る。美しき華やかなる夕景色。／夜は鮮やかに澄んで居る。星は燦然と大空をなし／深かき青き夜の色は落ち付きはらって居る。青き舷／燈の見へる船と出会った。涼しい。秋になった／様に一寸思われる。

五日。朝六時頃起きて見ると西の空に美しく朝日の光／を浴して居る峯が見える。東にはまた山が連らなって見え／る。シナイ山は夜の内に過ぎた。山が次第々々にあら／われて出て来る。二時頃スエズの町が遥かに見え出した。／紅海の奥スエズ湾は茲ニ盡きて之れよりイヨく運河／に入るのだ。スエズの旧市街は運河の西に当って静かに横／たわり新らしき町は河の入口に沿ふて西の岸にたてられて／ある。東は遥かにひろがりしアラビヤの砂漠で遠くに丘が／連らなって居る。海は白ろき砂の浅き底があると見えて水の／色が甚だ鮮やかに快活になった。紺の如き色がや、／緑を帯びて来た。船は僅かの荷を下ろす為めにとゞまり／検疫がある。一等二等はめ医者であった。物賣が来た。／絵葉書、ガラス細工、煙草、木の細工物、飴、葡萄等で／エルサレムの草花を押花にして賣りに来たのはキレイだった。／皆んなで葡萄を買った。二かごで五志ばかり。非常に安い。／しかも其のうまき事は（甲州どころでは無いと云ひ乍ら食っ／た）たまらない程である。白と黒とある。飴はあま過ぎる。／せまき河口に入る。舷の下僅かで急に浅くなる。直ちに／漠々たる原につゞく。部落が見える点々と人が居る。／らくだを追ふて行くのが見える。西岸には樹木がならび／大きな洋風の建物がありレセップの像が見える。日が暮／れて東の空が美しきローズ色をして居る。探海燈をつけ／て進む。五哩を一時間で行くのであるから静かである。／後ろに一隻ついて来る船がある。十二時頃スエズの運／河は湖に連らなった。向ふから一隻来る船がある。こちら／は止まって待つ。行きちがった船は

鎌倉丸であった。声を／かけ拍手して別かれた。再びせまき河に入る。岸に／虫の音が淋しく聞こえる。如何にも秋らしい。

七日。起きて見ると天気は好いが波が高い。

八日。波はおさまった。心持がよい。正午頃遥か／北にクレテ嶌を望む。午后はギリシヤ沖を通過して／居るのである。海は美しき青色を帯びて居る。甲板には玉突が盛んだ。

■9月9日、メッシーナ海峡に入り、つづいてシチリア島を通過。

十一日。昼飯の前にサルジニヤを見出した。やがてコルシカ嶌も見／えるコチくした岩の上に燈台等が見える。コルシカには／高き山が雲の中に頭を突き入れて居る。両方の海／岸とも一里半位はある様に見える。

十二日。朝運轉士井町君が起こして呉れた。船がマルセーユの近かく／の山の傍を通過して居るから見よと甲板に出る。稍々寒むい。／一帯に樹木の無い岩山である。砲台を築いた嶌が幾／つもある。遥かにマルセーユは朝もやの内にあって煙が／立ち上り高き山の上に寺の塔が頭をつき出して居る。／波止場の内に入り多くの船の中を通って扇形の濱の／岸についた。勞働者が大きな馬をつけた荷車を／牽いてやって来る。いよく勞働者まで皆な歐ロッパ／人となった十時頃此所で上陸する人々は／税関の検査を受けて後ち馬車でホテル行てしまっ／た。(ホテルの名はオテル ド ゼーネーブ。杉山と云ふ日本人／が居る)。午後石坂君[26]と散歩に出た。電車のある／通りを沿って東の方へ行く。町は中々賑はしく／盛んだ。女が非常に夥しく居る様に思った。店／の番等は皆な女で町にも若い女が活溌に往来／して居る。今迄の港では女が殆んど居なか／ったから特に目立つ。解からない乍ら佛語で／道を教わって郵便局へ往きまた町をぶらくして／居ると三潴松波[27]青木君[28]が向ふから来る。皆な／ホテルから散歩に来たのである。こゝで松波君／と僕等二人と共に山の上の寺へ往く事にした。海岸／に生の貝やかきを賣って居る露店がある。水夫等が／生で食って居る。(後略)

十四　朝起きた時に丁度船は動き出した。港を出て西南／に向って進む。二等室には僕等二人と英人一人とに／なり甲板も甚だ淋しい。

十五日。相変らず。睡たくて仕度が無い。少し暑くなっ／たので後甲板の椅子にころんで本を讀み乍ら／いつしか眠ってしまった。運轉士の井町君が／起こして来れた。一所に食堂に行て五目飯を／食べた。スペインの山と遥かに見ゆる町を水彩で画く。

十六日。昨夜は誠に心持ちよく眠った。七時に目が覺め／る。飯を食って玉突きをして運動する。西

班牙／の山が右に雲の内に見える。午后二時頃船／はシブラルタルの海峡に来た。嶮岨なる嶌の如／く見ゆる山がジブラルタルである。山を廻ると軍港が見／える。此辺には船が多く走って居る。引き続い／て陸が見へ陸には砲台や建物が夥しい。有名／なトラファルガーは此所等でトラファルガーの燈台／は岬と岬との間にある。暫らくしていよく大／西洋の口に出た。海は静かだ。／船と度々出会ふ。ビスケーもどー□此の通りであ／って呉れゝばよいが。頼まれた絵を画いて／井町、石川[29]及びサードメーターの高野君に渡す。／寢る前に甲板に出た。月が冴へて居る。十日頃で／あらう。

十七日。うねりがあるだけで至って穏やかである。盛に船に／出遇ふ。午后葡萄牙の南端の岬の沖を過ぎた。／三四里位もあらうか双眼鏡で見ると大きな建物が見／える。白き壁が伍々と山の麓に列らなって居る。海岸は／切り落した様な崖である。三時間余も見えて居ったが／遂に遠くかすみの内に消えてしまった。甲板で玉／をついて腕がいたくなった。

十八日。別に変った事も無く過ぐ。夕暮にビスケー湾沖に入る。

十九日。ビスケー、ビスケーと大ひにおどかされたビスケーも非常に／穏やかで白波が少しばかり見えるばかり大した動きも／無い。こんな穏やかな事は稀れだと船員も話して／居る。二時過ぎ梶取りが手紙を以て来た。斉藤君／から、再び上って来るのは何時ノ事やら分からぬから／船橋へ来給へとの事で上て行く。今日は汽船も／昨日の様には無い。時々小さな帆船が一二つ／居るばかり。帆の裏の陰になった色が美しい等と話／す。茶が来て一つのコップを二人で飲む。四時で／water が済む。後ちすしをたべる。／夜月が冴えて風は寒むい。十二三日の月。／ビスケーで月見をしようとは思わなかった。／荒川附近で寫生した水絵を斉藤君に送る。

二十日。いよく明日着英の筈。荷物等用意し、かたづける。／最後だと云って玉を突く。うまくなった。／お分かれで日本飯。

【註】

1　1905(明治38)年1月1日の日記に「燈台ノ番人ハ春ニナッタラ直キニ取リカヽルハヅ」とあり、8月4日頃の日記には「燈台守の絵（中略）のバックを描き居る」とある。この作品は、同年9月の白馬会十周年記念展覧会に出品した《燈台守》と考えられ、早くから構想があったと考えられる。なお、同出品作は、油絵で50号位と日記にある。

2　南の母校である内海小学校の第三代校長・原田品太郎。1914(大正3)年に制作した同氏の肖像（南薫造記念館蔵）も現存する。

3　美校で交友があったマリー・イーストレーキか。日記の住所録には、イーストレーキの住所として神田三崎町とある。（以下、註において住所地の記述があるものは、すべて日記の記述による）

4　岡田三郎助(1869-1939)。麻布新堀町

5　榎本彦。本所区向島／牛込区市ヶ谷加賀町

6　児玉末男か。麹町区元園町／青森県弘前市／神田区三崎町

7　吉崎芳男か。本郷区菊坂町

8　1905年４月１日から１週間、美校で開催された恤兵展覧会に《試験宦ヲ手ニセル人》を出品している。同作の大きさは、日記によると「号外」である。

9　武田粲か。

10　1905年４月１日から１週間、美校で開催された恤兵展覧会の出品作《いもの場》の関連作か。

11　猪飼俊二。尾州海東郡

12　貝塚暢三。制作した肖像画は、油絵で８号との記述が日記にある。

13　不詳

14　富本憲吉(1886-1963)

15　森田亀之輔(1883-1966)

16　依田四郎。東京帝国大学出身

17　渡辺鉄造(1885-1980)。南の中学時代からの友人。東京帝国大学法科大学出身。専攻分野は商業学。1910(明治43)年～1913(大正２)年までイギリス、ドイツ、ベルギーに留学

18　不詳

19　永田二郎(1883-1971)。埼玉県北足立郡馬宮村。さいたま市出身の油彩画家

20　長野市字下岡田／神戸市奥平野村

21　桑木彧雄(1878-1945) か。桑木は東京帝国大学理科大学出身。専攻分野は物理学。ドイツに留学し、1909(明治42)年帰国

22　三潴信三(1879-1937)。東京帝国大学法科大学出身。ベルリン大学、ローマ大学等で法律を学び、1909(明治42)年帰国。博多会会員。麻布区仲之町

23　斉藤文也。日本郵船会社の社員で博多丸に乗員

24　松久祐馬。博多会会員。岐阜市美園町

25　高橋養助(1878-?)。千葉医学専門学校出身。ミュンヘン大学等で医学を学び、1910(明治43)年帰国。博多会会員。赤坂区霊南坂町

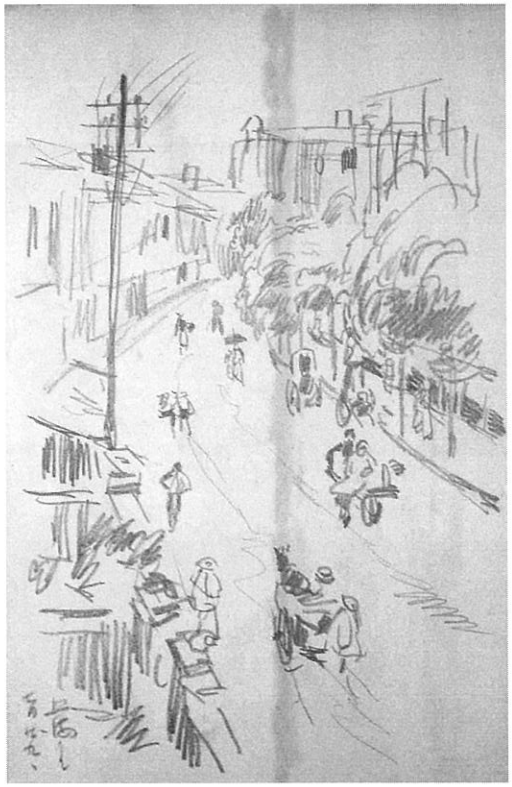
26　石坂正厳。博多会会員。東京府北豊島郡南千住町

27　松波□太郎。博多会会員。岐阜県稲葉郡加納町

28　青木薫(1878-1938)か。青木は東京帝国大学医科大学出身。ストラスブルグ大学等で医学を学び、1913(大正２)年帰国

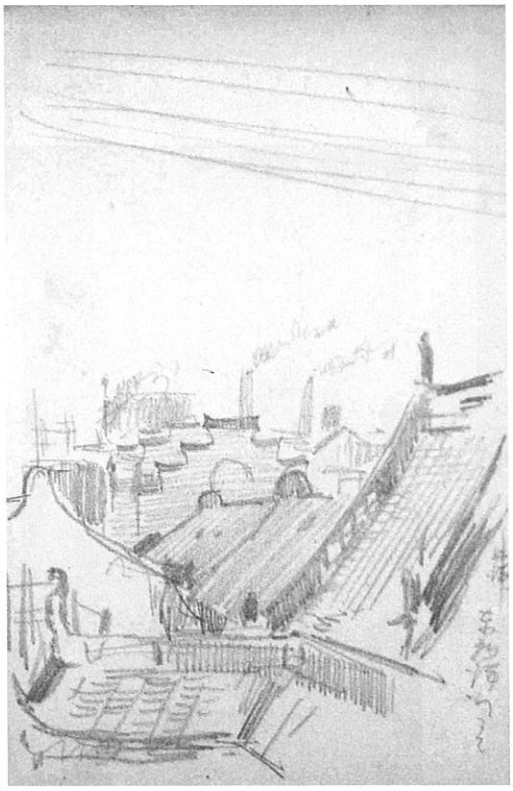
29　石川剛(1883-?)か。石川は東京帝国大学法科大学出身。パリ大学等に学び1910(明治43)年帰国

(ふじさきあや／当館学芸員)



1　上海にて 七月廿九、

2

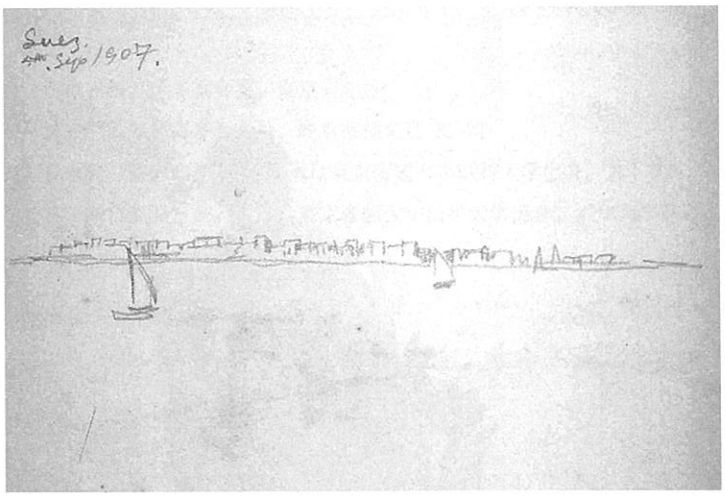


3　上海 東和洋行にて

4

5　コブラつかひ

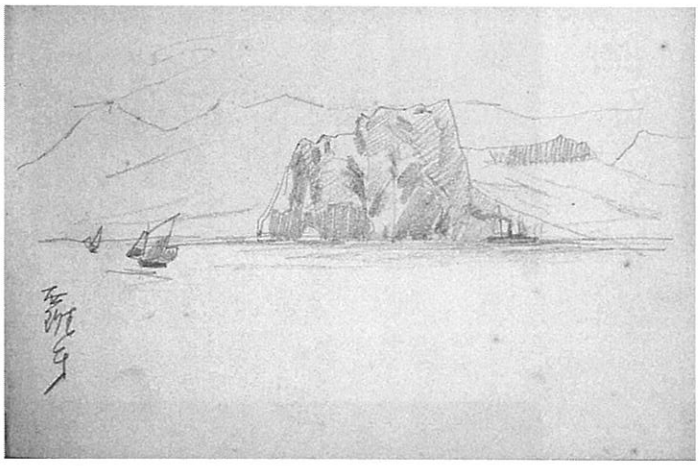
6



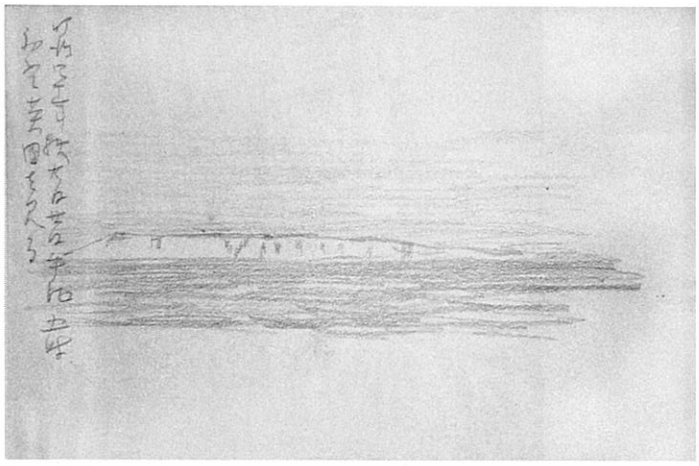
7　Suez 5th. Sep 1907.

8

9　Corsica

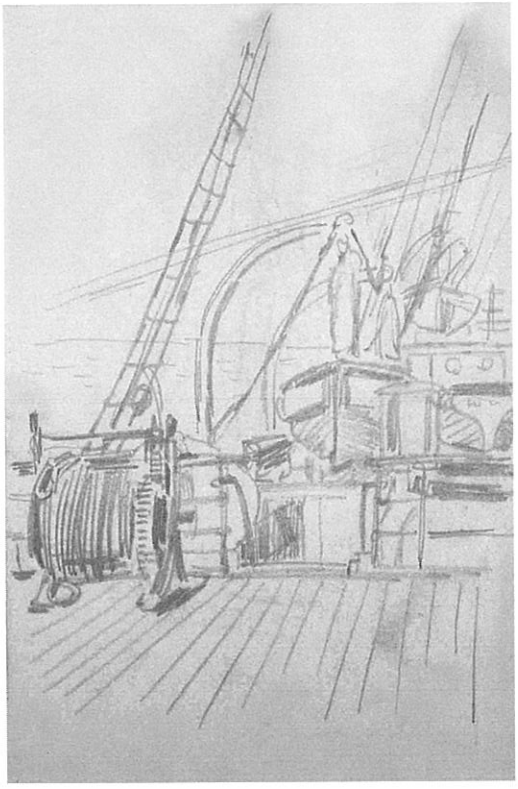


10　西班牙

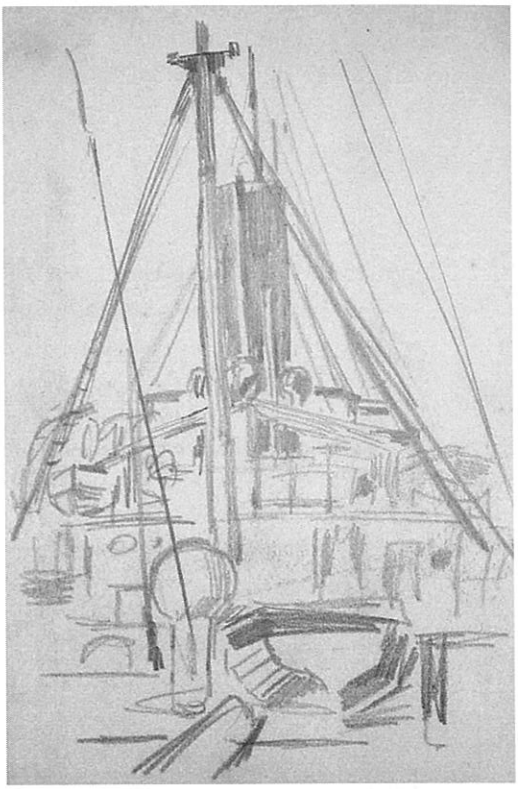


11　明治四十年秋九月廿日午后五時．初めて英国を見る

12

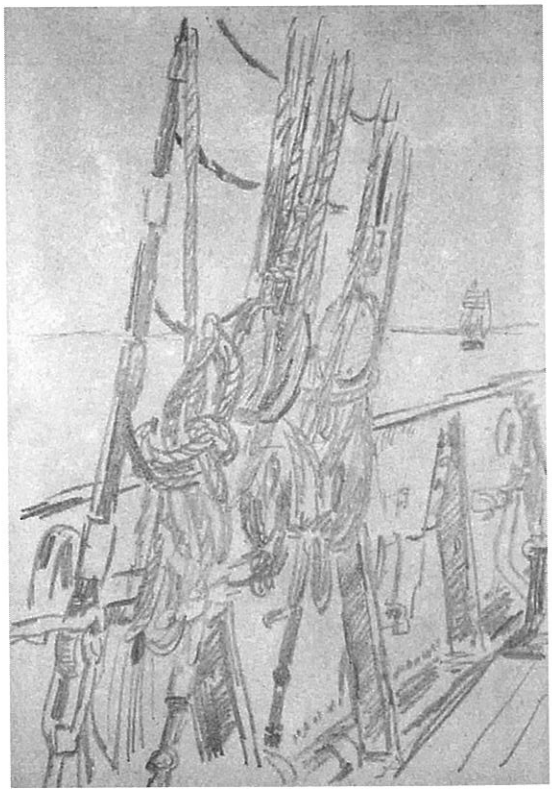


13



14

15



16

広 島 県 立 美 術 館　研 究 紀 要　第 11 号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.11

発 行 日　2008年3月31日

編集・発行　広 島 県 立 美 術 館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014　広島市中区上幟町2－22
2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel.082-221-6246　Fax.082-223-1444

印　　刷　株式会社 タカトープリントメディア
〒730-0052　広島市中区千田町3丁目2－30
Tel.082-244-1110